

第2章 中学講義録の世界

菅原亮芳

1. 少年雑誌にみる講義録広告のなかの中学講義録の位置

前章において、すでに明らかにしたように大学講義録は、明治30年代を契機として新しい方向へと発展した。その一方で、独学の世界には新しい動向が生まれた。

1900年代に形成される我が国の近代公教育制度の確立、学歴主義の原型の形成は、人々に正則の順序を踏んで学習することを要求した。正規の長い学校階梯を段階的に、順序よく学んでいくことが正統な学習方法であるということが、均しく国民の前に提示されたのは1900年代であった。

わが国における学校系統の形成は、人々に中等レベルにおける教育資格を要求した。その資格は、高等教育機関入学者が絶対的に身につけておかなければならないパスポートであった。

独学の世界は専門的職業資格を取得する道としての独学の道ではなく、中等学校卒業資格を取得するための独学への道へと変化した。

早稲田大学の中学講義録や大日本国民中学会の中学講義録などの出現はまさにそうした変化を端的にあらわすものであった。

ところで、中学講義録とは、主に小学校卒業後、中等学校に進学し中等教育を受けたいと思いつながらぬ、それがはたせずにいる青年たちに対して、民間団体が正規の中学校五ヶ年の教育課程を数年間に編成し、発行した通信教育用教材のことである。

これら中学講義録群は、まさしく中等教育の教養を身につけたいと思っている人たちの学習要求にこたえるための重要な自己学習の媒体になっただけでなく、後述するように中等学校卒業資格取得、とくに専検合格等への受験準備書としての役割も果たしたのである。

では、中学講義録は明治・大正・昭和戦前期に刊行された講義録の普及拡大過程のなかでどのような位置を占めていたのだろうか。

ここでは、明治期から大正・昭和戦前期にかけて刊行された少年雑誌、なかでも『少年園』¹⁾・『少年世界』²⁾・『中学世界』³⁾・『少年倶楽部』⁴⁾に掲載された講義録広告を整理しながらその位置を確かめてみよう。

明治21年創刊の『少年園』に掲載された講義録広告に即して明治20年代の講義録広告掲載状況とその種類をまとめた結果が表1である。

この結果から、現在の調査の段階であるが『少年園』に掲載された講義録広告は、累計で85回であった。講義録の種類は、数学、速記、専門学、英語、珠算、女学、医学、薬学、教員検定、独逸語、漢文、簿記、工学、中学、鉱山、就職、写真術各講義録、17種類である。

では、これらの講義録はどのような目的をもって刊行されたのだろうか。

第一には、数学や英語などの教科の知識を習得させることを目的として刊行したのものがある。

第2章 中学講義録の世界

表1 『少年園』と講義録広告の種類

少年園 発刊年	種 類																	
	数学	速記	専門	英語	珠算	女学	医学	薬学	教員 検定	独逸 語	漢文	簿記	工学	中学	鉱山	就職	写真 術	合計
明治21年	1	1																2
22		12	2	2	1													17
23						3	1	1										5
24	1	5	2			1			2	2	3	1	1	1				19
25		1					2	1		1	3				1			9
26		9									1			1				11
27		13							3					1		3	1	21
28		1																1
計	2	41	3	2	1	4	3	2	5	3	7	1	1	3	1	3	1	85

(『少年園』各年度より作成)

数学では、明治21年11月18日号に掲載された「数学通信講義録」は「初学者の解し易きを主として算術及代数幾何の初歩より講義」することを目的として刊行された。また明治24年1月3日号には「数学十三科講義録」の講義録広告が掲載され、「数学に志ある者本録に由らは独習自在知らず必ず数学の蘊奥まで究め得ること勿論」として初学者の算術から高等数学・積分・微分までの高度な内容まで教えるとしている。

英語では、明治22年5月18日号に国民英学会の「英語講義録」広告が掲載され「遠隔の地に在るため其意を果さざる者鮮しとせず本会は今此種の人々の便益を計り通信科を設け作文添削質疑の答解等躬つこふ本会に入入りし教授を受くると一様少末遺憾なからしむ」とうたっている。

このように遠隔の地に在るため、その志を果たすことができない人たちに便益を計ることを目的として英語講義録を発行し知識の習得に努めさせている。

第二に実用的知識・技術を習得するための講義録が刊行される。

このなかでも、広告回数が他を大きく引き離しているのは、速記術に関する通信教授である。そのなかでも明治23年2月21日号に、はじめて掲載され終刊まで万遍なく広告化された速記講義録は、速記法専修所のものであった。広告内容には「自宅独習生募集」とあるのみで、どのような内容・方法で通信教授が行おうとしたのかは定かではない。ただ、月謝20銭、2ヶ月で卒業となっているにすぎない。

ところで、我が国における速記術は田鎖綱紀がアメリカの速記文字に刺激され工夫し、明治15年「日本傍聴筆記法」を公にしたところに始まるとされている。しかし、当時、実用的でなかったため田鎖の門下生が改良を加えていった。広告に改良速記法となっているのはそのことを裏づけている。しかし、改良は長足の進歩をもって明治23年国会開設において議事筆記として用いられるようになった。すなわち速記術の技術をもってすれば、庶業に入り立身出世することが可能な時代となり、多くの人々を速記に引きつけたことは推測される。実用的技能を求め新しい知が生まれていたのである。

実用的技能を習得する通信教授は、速記の他に珠算がある。珠算は、我が国における伝統的計算法の一つとして長い歴史を持つが、明治維新以後、和算にかわり洋算が導入され九九を覚えていれば、極めて簡便となった。これは珠算計算としては画期的なことであった。学校教育で珠算は、全廃に近かったが、実社会では、珠算を重視し、大都市には多くの珠算塾が存在し、珠算技術を普及させていた。「珠算除法速算」を通信教授するのは事務の繁雑を取り除くに最適であり、この技術を取得することは学歴なしに有力な職業に従事する方法の一つであった。

ここには、個人の通信教授、熊本県の宮崎直太の「珠算除法速算通信教授」が広告されている。広告内容には「小学生徒を教授するにも繁雑の事務を取扱うにも最も適切の方法⁵⁾であると述べている。

第三には、この実用的技能を習得するための通信教授と並んで手段的な講義録が発行されることがもう一つの特徴である。

たとえば、医学、薬学・教員検定のための準備書としての講義録である。これらは明治維新後、国家試験による資格取得に向けての学習の手段となっていった。例えば明治24年1月3日号の東洋大学の前身、哲学館の講義録広告には「館外員の制を設け毎月3回講義録を出版し教育家宗教家史学文学に志ある者並に文部省教員検定試験に應ぜんとする者」のために講義録を発行するとある。同年5月18日の広告には「今般文部省より検定試験施行の旨告示相成候に付き右志願者にして購読せんと欲する者左の規則に従い申し込むべし」と書かれている。

このように中等教員検定試験の準備書としての目的のもとに刊行されたことがわかる。この講義録の他には、高等学術研究会の「高等学術講義録」がある。この講義録は「現に教職にあるものの自修或は参考書又は師範、中学校の教員たらんと欲するもの」に「最良唯一の必須資料」とうたい、各巻には「文部省検定試験問題答案⁶⁾」を附録として掲載している。

また明治27年4月18日に広告された明治講学会の「尋常師範学科講義録」広告には「本会の目的は小学教員を養成し且つ中等教育の普及を図るにあり」と明言するように小学校教員検定

第2章 中学講義録の世界

試験制度のための準備書として刊行されたものである。

以上のような小学校・中等学校教員検定試験受験のための準備書を目的とした講義録だけでなく、医者・薬剤師になるための検定試験準備書としての講義録も刊行される。それが「医学薬剤学受験科講義録」である。明治23年11月18日号の広告には「医学科通信講義は志士の為め内務省試験に必要な科目を綿密とを主として教授す」とある。また「薬学科通信講義」の広告には、「法律10号に基づき純然たる薬剤師を養成せんが為に発行せるものにして内務省第3号に示せる薬剤師受験科目を懇切に教授し薬剤師たる実力の得せしむ」としている。そしてこれらの講義録を刊行した医学科薬剤科通信講義録発行所は「独逸語独習誌」という独逸語の通信教授も同時に始めているのである。

第四には、女子としての教養を学ぶ学習書として、女学講義録が発行される。それは女学雑誌社の「通信女学講義」である。この講義録は明治23年2月21日号に初めて広告として登場する。そこには、「1年で女の心得になる学問を手易く教授し家に居て用事の暇ま暇まに稽古の出来る様に仕組たるものにと文章は誰にも読める程やさしく其上尚ほ分からぬ時は手紙にて質問出来る様に致し、毎月1冊発兌」するとある。明治24年3月18日号には「本年1月に至り、1ヶ年の課業をなし卒へて、快よく全科を卒業したるもの七百余名あり」と書いている。

第五には、中学講義録であるが東京学館の講義録のみである。しかしここには限界があり、のちにみるように大日本国民中学会の中学講義録や早稲田中学講義録のように中学校の教科目のみを講義したのではなく、英学、算術、代数学、幾何学、三角法などとともに教育学や論理学、果ては簿記学・速記学まで入り込んでいる。その意味でいえばのちに検討する中学講義録と同じ種類のものとはいえない。

以上のように、『少年園』に掲載された講義録広告を素材として明治20年代の講義録の世界を概観してきたが、この時期はどちらかといえば実用的な技能習得、検定試験のための手段的講義録、教養としての講義録が主流を占めていたと思われる。天野郁夫氏が明らかにした私立専門学校の講義録は、東京専門学校の講義録広告が一度掲載されたに過ぎない。それは、『少年園』の主要な読者対象が青年期前期のものであったため法律講義録などの専門学の講義録は他のメディアに広告を掲載したものと思われる。

ではこれらの講義録広告に変化があらわれるのはいつ頃なのであろうか。

それは、明治30年代に入ってからである。

その変化は、まず第一に、講義録広告の掲載回数多さと種類の多様さである。表2は『少年世界』に掲載された講義録広告を種類別にまとめた結果である。

この結果からもわかるように、『少年世界』には、明治28年より明治末年まで34種類、累計639回の講義録広告が掲載されている。

表3は、明治31年創刊の『中学世界』に掲載された講義録広告を種類別に一覧化した結果である。ここには、明治末年まで41種類、累計848回にわたって講義録広告が掲載されている。

次に、『少年世界』と『中学世界』に共通してみられる特徴は中学講義録の広告が多いことである。

『少年世界』の場合は明治29年に中学講義録の広告掲載が始まり、明治41年にはさらに増加し、明治末年まで220回、全体の34%が中学講義録に集中している。

『中学世界』の場合は明治末年まで他の講義録を大きく引き離し282回、全体の33.3%が中学講義録に集中している。

これら中学講義録に続いて講義録広告の掲載が多いのは、『少年世界』では、英語講義録の12.7%、習字講義録の10.8%、速記講義録の7.5%である。英語講義録は、明治31年より広告が掲載されるが、習字講義録は明治39年からであり、明治40年代には中学講義録に続いて講義録広告数を増加させている。その一方で、速記講義録は、明治35年以降姿を消している。

『中学世界』では、『少年世界』と同様に、英語講義録11.6%と中学講義録に続くが、次に多いのは絵画講義録で10.4%となっている。続いて速記講義録の5.1%であるが、『中学世界』には『少年世界』とは異なり速記講義録広告が明治末年まで掲載される。

また、『中学世界』に掲載された講義録広告で注目されるのは、広告掲載数は少ないが「巡査看守」・「文官」・「航海学」などの実業講義録広告が掲載されることである。これは『少年世界』にも明治末年に「鉄道」・「実業」各講義録が掲載されるのと同様に注目される。これは大正・昭和戦前期になると、実業講義録が中学講義録と同様に講義録の主流をしめてくるが、その前史を示唆している。

では具体的にどのような中学講義録が広告化されたのだろうか。

表4は『少年世界』に表5は『中学世界』に掲載された講義録の継続年を一覧化した結果である。

まず『少年世界』に掲載された中学講義録広告の掲載状況について検討してみよう。

この雑誌に中学講義録広告が広告化されるのは、大日本中学会の中学講義録である。この講義録は明治29年に初めて登場し、明治32年まで頻繁に掲載される。この中学講義録が近代日本における中学講義録の嚆矢であると思われる。広告には、「自宅講習生第五期会員募集」とあり、つづいて「本会は明治二十五年十一月、創立現在会員八千五百余名に達す」とある。

大日本中学会の講義録の刊行の目的は「我国体に基き国民必須の高等普通学科を授け智徳を増進し富強の固め忠君愛国の至誠を貫徹すべき帝国有為の国民を養成することを期す」とある。

この大日本中学会は教育勅語が發布された二年後の11月に創設されたことは注目される。この講義録は「我国体」すなわち忠君愛国思想の鼓舞と国家富強のスローガンのもとに「帝国有為の国民」を養成することを目的として高等普通教育を「国民必須」の学科として明治国家への統合と順応する国民を育成することを目的として刊行された。

「国民必須」の学科は「中学校令の主旨に基き」、「中学校五ヶ年の課程を満三ヶ年に分ち三学級に編成し自宅独習せしむ」と卒業となるとされた。すなわち国家が用意した枠組、教育内容に準拠し、わが国の中学校教育の拡張の一翼を担うことを目的として大日本中学会の中学講義録は発行されたのである⁷⁾。

次に、明治29年に登場するのは、それほど頻繁に掲載されるわけではないが、普通教育学会の普通教育全科講義である。この講義録は明治40年の広告にも掲載される。また明治31年に登場する講義録は、明治講学会の中学科講義録と帝国中学会の諸学講義録であるが掲載期間はわずかである。

ところで、明治講学会は、先述したように、中学科講義録の他に師範学科講義録を発行していた。広告文には「本会は世に卒先して小学校教員を養成するの目的を以て明治二十六年十一

表5 『中学世界』掲載講義録推移一覧

講義録名称	明治														
	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
講義録名称															
通学専門講義録(大八洲学校)															
女子講義(大日本女学会)															
尋常師範学校尋常小学校教員受驗講義録(大成学会)															
速成進級師範学校入学受驗科講義録(須藤周三郎)															
速記法自修習生(速記学専修所)															
理科講義録(大日本理科講習会)															
日本語講義(大日本通語講習会)															
大日本中学校講義録(大日本英学会)															
師範学校講義録(明治講学会)															
中学校講義録(明治講学会)															
銀行事務講習会講義録(銀行事務講習会)															
簿記学通信講習会講義録(簿記学通信講習会)															
英語六ヶ月間速成(東京英語学会)															
東京政治学校講義録(東京政治学校)															
東京政治学校講義録(大日本実業学会)															
独逸語学自修講習(独逸学専門学校至誠学院)															
尋常中学校講義録(哲学館)															
高等学校講義録(哲学館)															
算学科専修講義録(哲学館)															
仏教専修科講義録(哲学館)															
文藝講義録(大日本文藝学会)															
大日本女学校講義録(大日本女学会)															
数理学通信講習(東京数理学会)															
正則独逸語通信講習(大日本独逸学会)															
算術通信教授(東京数学講習会)															
仏教普通科講義録(哲学館)															
大日本新法典講習会講義録(大日本新法典講習会)															
西語漢文字学講習会(国語漢文字学)															
英文社講義(英文社講学会)															
東京修士館講義録(東京修士館)															
大日本英語講習会講義録(大日本英語講習会)															
医学科講義録(明治講学会)															
商業学簡易通信講習(大日本商業学会)															
初等教員検定用学術講習(帝國通信講習会)															
尋常小学校教員検定用学術講習(大日本小学校教員養成会)															
大日本普通学講習会(講義録)(大日本普通学講習会)															
大日本実業学会講習録(大日本実業学会)															
大日本簿記学会講習録(大日本簿記学会)															
子スフィード氏第三英文典講習録(上原書店)															
イーストレーキ英語講習録(イーストレーキ英学会)															
小学校教員検定受驗用学術講習録(小学校教員講習会)															
新式速記術自修講習及通学委員募集(帝國速記術協会)															
普通文官検定所書記試験学校通信講習(普通文官試験科講習会)															
府県師範学校入学受驗科講習録(帝國通信講習会)															
尋常小学校教員検定受驗科講習録(帝國通信講習会)															
漢文学講習録(益友社)															
文章通信教授(日本文章学院)															
経通信教授(木田実業)															
初等学館々外生募集(初等学館講習録発行事務所)															

(少年世界、明治33年刊載)

(少年世界、明治38年刊載)

月以来師範学科講義録を発行し四千余名の卒業生を出し皆現に教育に従事す、故に本会は又中等普通の普及を謀る為め更に中学科講義録を発売せり」という。中学科は「二年半卒業」とある⁸⁾。

この明治講学会の中学科講義録について『小学卒業立身案内』を著した高柳曲水は怪しげな講義録出版社として次のように述べる⁹⁾。

「明治四十年八月第百二十版といふ会則を見て驚いたのは担当講師の中に内藤耻叟落合直文根本通明などといふ疾つくこの世には籍のない先生方達が並べられてそれが『文部省改正中学校令に準拠し』といふ触れ込にて照応するそして二十七年三月の天覧の栄を蒙るといふのだが推算して見るとこの原版は約一四五年前のものらしい」

たしかに、高柳がいうように、この会の広告文の変化を追跡してみると、会員数の変化は年次如に増加しているが広告内容や講師人にはなんら変化がなく死亡したものまで講師となっているのは信頼の薄い出版社であるといわれてもしかたがない。

さて、明治32年になると哲学館の尋常中学科講義録が広告に登場するが、ほんの一年間の掲載で消え、明治40年になって東洋大学出版部の東洋大学中学講義録と改称され再登場するが、明治41年を境にこの誌上から消えている。

明治33年になると大日本普通学講習会の大日本普通学講習会講義録が出るが、掲載期間は一年間と短命である。

この講習会の広告文には「会長従二位子爵交野時萬君、顧問従五位松田道夫君」と権威づけし「文部省令の趣旨に基き通信教授法により講義録を頒ち中学の学科を最も懇切に講習せしむ」とうたう。そして「十五ヶ月にて卒業し証書を授く」とある¹⁰⁾。講義録販売競争の激しくなる明治30年代には中学校5ヶ年の課程を十五ヶ月で終了とは誇大広告にすぎる。

先の高柳は「大日本普通学講習会と帝国中学会とは共に同一人の経営する所だといふが何も一人でやる同種類の商売を別の人間がやるやうにみせつけるにも当るまい。それから二講義録を一にして科目五十科などという矢鱈な事も止めたい¹¹⁾と批判している。

以上のように、怪しげな講義録が横行するなか、明治39年に登場する大日本国民中学会の中学講義録の広告は極めて頻繁に掲載され明治45年まで雑誌を賑わし、明治43年からは速成中学講義録の広告も同時に掲載される。

高柳が批判した帝国中学会講義録は明治41年に広告される。同年には帝国模範中学会の帝国模範中学講義録が広告化されるが一年ないし二年で消えてしまっている。この結果から泡末的な講義録が多かったことが想像される。同年には早稲田大学出版部の早稲田中学講義録が登場するが明治43年に消えていく。

この他に帝国青年教育会の中学講義録、帝国青年学会の最新中学講義、大日本青年中学会の最新中学講義録、成溪社中学会の新式中学講義録、大日本通信教育会の中学部講義録、名教中学会の中学講義録が明治未年に登場するのである。

次に、『中学世界』に掲載された中学講義録広告を素材に『少年世界』の掲載状況と比較しながら検討してみよう。

この雑誌に中学講義録の広告が最初に登場するのは明治31年であり、そこに掲載されたのは大日本中学会のものである。この講義録広告は『少年世界』と比較すると掲載期間が長く明治

第2章 中学講義録の世界

38年まで広告化されている。また同年に掲載されたのは明治講学会の中学講義録であり、これも『少年世界』と比べて掲載期間が長く明治43年までである。

このようなことから、中学講義録は『少年世界』というメディアから『中学世界』というメディアに広告の場所を移動したのではないかと推測される。

明治32年になると哲学館の尋常中学科講義録が広告される。しかし一年間で消える。明治38年には中学講習会を母体とした中学講義録として再登場し、明治40年には東洋大学の新式中学講義として明治41年まで掲載される。

明治33年には、大日本普通学会講習会の中学講義録が広告化され明治40年まで掲載される。明治37年には大日本国民中学会の中学講義録が登場し、明治末年まで広告され、明治43年には速成中学講義録をも広告する。明治39年には帝国中学会の講義録、明治39年には早稲田中学講義録が登場し明治末年までに広告される。明治40年には帝国模範中学会の講義録が出るが、明治43年には消える。帝国青年中学会の講義録は明治42年に登場するが翌年には消えてしまう。このことからも蜉蝣講義録が多かったことがわかる。

明治43年には大日本青年中学会の最新中学講義録、明治45年には大日本通信教育の中学部講義録が登場する。名教中学会の講義録は明治44年のみの掲載である。

大日本青年中学会の中学講義録の広告文には「国民教育の最新最良機関」とうたい「本会卒業生は私立三大学専門部特科へ無試験入学することを得べし」とある。『少年世界』明治43年8月22日号には「明治大学中央大学日本大学法政大学」の四大学の名前を掲載している。

このようにみえてくると、比較的長く講義録広告として掲載されるのは大日本国民中学会の中学講義録と早稲田大学出版部の早稲田中学講義録であることがわかる。

先の高柳は大日本国民中学会の中学講義録について次のように述べている。

「大日本国民中学会講義録は早稲田中学講義録の欠点を満して最も平易に又最も親切に作られて居る講義録としてはどうしてもこれを第一に推さなければならぬ。第一図解で講義を助けるといふ目的から絵をたつぷり入れた事、第二英語図画の説明の如き通信教授で至難なものを種々な工夫を凝して兎に角くも解るやうにして居る事、第三盡く総振り仮名にして何人にも読み得るやうにして居る事、第四全然文部省令に拠つて学科の配置、紙数の割宛なども一致して居る事。これらは質実親切で誠によいことだと思ふ。旧来の講義一万五千頁を廃棄してこの春（明治40年）から新版にしたといふ事である。是迄の二三の投書は講義の古いことを訴へた者があつたが、此の改版で不満足は除去せられたらう。毎年と迄は行くまいがこの方針では時代と共に講義録を改版しつつ進みゆくことは何の講義録発行者も必ず忘る可らざる義務である。」

この講評から見るかぎりでは、早稲田中学講義録よりも大日本国民中学会の中学講義録の方が独学者の自学独習としては優れていたことがわかる。高柳は、講義録への図解の導入、総ふりかなで読みやすくしたことなどであるが、それ以上に文部省令すなわち中学校令施行規則に即して改版したことを高く評価しているのである。

それでは、明治末年に登場する大日本青年中学会や大日本通信中学会の中学講義録なども念頭に置いて、大正・昭和戦前期には、どのような掲載状況の特徴と変化を示すのか検討しよう。

当時もっともよく読まれていた『少年倶楽部』に掲載された講義録広告を手がかりとしてみ

第2章 中学講義録の世界

よう。

表6は『少年倶楽部』に掲載された講義録の種類を一覧化したものである。

この結果からもわかるように、講義録は大正3年より昭和19年までで54種類、累計2,288回が広告として掲載されている。

全体的な傾向をみると、昭和5年を契機として、講義録広告の数は減少することが注目される。今回の調査のかぎりで見れば、昭和5年までが少年雑誌に掲載された講義録広告の花形時代であるといえる。しかし、昭和5年以降は全く講義録広告がなくなったわけではない。

講義録広告のなかで最も頻度の高い講義録は中学講義録であるが、他の講義録を大きく引き離しているとはいえない。

中学講義録は16.7%である。それに対して鉄道員講義録11.4%、教員講義録8.7%、通信講義録5.9%、英語講義録4.7%、珠算講義録4.6%、航海学講義録4.5%、銀行事務講義録4.2%、商業講義録3.4%であり、農業は3.4%である。

明治期の講義録の主流であった中学講義録は大正・昭和戦前期でも講義録の中核の一つであるが、これと対等に鉄道・通信・航海学・銀行事務などの実業講義録の広告頻度が高いことが注目される。

昭和5年以後は掲載回数こそ激減するが中学講義録は依然広告化される。しかし、それ以上に普通文官講義録広告が掲載される頻度は高くなっているのが特徴である。

表7は「少年倶楽部」に掲載された講義録の継続を一覧化した結果である。

では、どのような中学講義録が掲載されるのか検討してみよう。

この雑誌に中学講義録が広告化されるのは大正4年である。それは、大日本国民中学会の中学講義録である。この講義録は昭和5年まで頻繁に広告紙上を賑わすがこの年を契機としてぱったり消え、昭和18年に再登場してくる。

大正4年5月1日号の広告には「大日本国民中学会の現在会員は日本全国の中学生徒数よりも多き事更に七万九千七百余人也」という。正規の中学生「一二万四千二百六人」に対して「二十万三千九百九十五人」の会員を誇っている。

早稲田中学講義録は大正5年に登場するが昭和4年を契機として消え昭和15年に再登場する。大日本模範中学会の中学講義録の広告は大正6年から昭和5年まで掲載されるが、その後は広告紙上には登場してこない。また大日本通信中学校の中学講義録広告は、大正12年に掲載されるが、その後は昭和11年に掲載されただけで消えてしまう。

しかし、大日本通信中学校は大正12年7月1日号に広告を載せ、中等教育の必要性を強調して次のようにうたう。

「成功の関門

諸君は中等教育を受けたりや諸君が社会に出でんとする時には必ず先づ第一に『中等教育を受けたる』の質問に逢着せん。其時若し『否』と答へたらんには其人は最早世に出づるの機会なからん」

昭和に入り2年には「東京帝国大学系の中学講義録」という触れ込みで昭和中学会の昭和中学講義録が登場してくるが昭和5年には姿を消している。昭和3年には日本大学出版部の日本大学中学講義録の広告が掲載されるが昭和5年で消えてしまう。

しかし、昭和5年には、独逸学協会中学部の模範中学講義録の広告が掲載され「本会卒業生には、中央、日本、専修の三大学へ無試験入学の特典あり」、「何れの方面に成功するにせよ中学校卒業位の学力がなくては、夫れは至難のことである。小学校卒業後色々の事情で上の学校へ行けない諸子は必ず当会に入会して、此の中学講義録を学び、立身出世の基礎を造せよ」¹³⁾とうたっている。しかし、この広告はそれ以後登場しない。同年に掲載されたもので、長期にわたって刊行されたものとしては、帝国教育会出版部の帝国教育中学講座がある。この講義録広告は頻繁ではないが、昭和15年にこの雑誌の広告が誌上に登場してくる。

そこには「教育界の中央教育機関帝国教育会」とある。そして「小学校は誰でも卒業する。出世を望む者は更に一步進めて中学程度の学力を養へ。中学程度の学力こそ成功の必要条件である。急げ成功の準備を」と檄を飛ばす。さらに「文部省各大官はじめ各府県視学官師範中学校長約一千名の賛助」と権威づけ「これぞ天下独学青年の渴望せる通信中学校」といい「日常生活にも直ぐ役立つ」という¹⁴⁾。

以上のような作業を通して、第一には、近代日本における中学講義録の系譜をたどってみると長期にわたって中学講義録を刊行し続けていたのは、大日本国民中学会の中学講義録と早稲田大学出版部の早稲田中学講義録の二種類であることがわかった。第二には広告文の内容の変化から伺えることは、1920年代を契機として教養としての中等教育ではなく学歴社会のなかで中等教育を受けていないと自らの立身出世が保障されない世の中が到来したことを物語っていることがわかる。このことはこの時期を境として実業講義録が講義録広告の花形となり技能養成・職業斡旋の機能まで果たすようになることから推察できるのである。

例えば昭和11年8月15日号の大日本通信中学校の中学講義録広告は次のように語る。

「無学は男の恥

立身の基は先づ中学卒業から

小学校だけ出た方は全国に何百万人とあるが、不幸にも家庭の事情で上級の学校に行けず、スグ実社会に出る人や家業の手伝ひをする方も沢山ある。かかる有為の若人が、小学以上の勉強を続けず、無駄に日を過ごす事は当人のためのみならず、新興日本のためにも悲しいことだ。

今日の実社会で成功するには実際、小学校卒業だけの学力では充分でない。どうしても中学卒業程度の学問がなければ軍人になるにも官費学校に入るにも実業家になるにも決して大成しないのみならず生活さえも不安である。」

しかし、言うまでもないが、少年雑誌に掲載された講義録広告が実際の講義録発行数と一致するわけではない。『少年園』・『少年世界』・『中学世界』・『少年倶楽部』はそのある部分を反映しているにすぎない。そこで、ここでは、東洋大学の中学講義録、早稲田大学出版部の中学講義録、そして大日本国民中学会の中学講義録の刊行の歴史的展開過程を追求する。第一に、これら中学講義録発行所は、どのような目的で中学講義録を発行しようとしたのか、その特徴と変化を明らかにする。第二に、視点を学ぶものの側に移し、これら中学講義録を利用する人々は、どのような動機で入会し、何をめざして学習したのか、その学習様式まで視野を入れ、これまで収集し得た資料に基づいて中学講義録の世界の一端を明らかにしようと思う。

2. 中学講義録の嚆矢—大日本中学会—

先述したような作業からも明かになったように、中学講義録の嚆矢は、現在の調査の段階ではあるが、大日本中学会発行の中学講義録であると思われる。大日本中学会は、中学校令の一部改正が行われた翌年すなわち明治25年に創立された。

創立当初の設立の主意は不明だが、明治31年9月25日号の『中学世界』に掲載された広告によると、「我国体に応じたる国家主義に基き国民の智徳を啓発し忠良着実の人士の養成を期す」とある。さらに「学資の不足学年の長きが為又は業務の為遠く遊学する能はず空しく恨を呑み廃学するに至る不幸の青年諸氏を」対象として「座ながら高等普通学科を研究せしめて」、「公私各学校の入学試験文官教員検定試験等の予備講習をなさんと期す」とある。学科は「中学令」(ママ)に準じ「中学校五箇年の課程を満三年に分ち三学級に編制し各学級共毎月三回講義録」を発行する。学費は入会金三〇銭、会費毎月六〇銭前納することとある。この時点までの会員数は一万四千余名とうたった。しかし、その後、この中学会がどのように活動し、いつ廃止されたかは不明であるが、広告の内容には微妙に変化が伺える。

例えば、明治35年4月10日の広告には「今や日英同盟成りて極東新強国の一異彩を世界に放ちたる(略)人材養成の必用愈々急迫し随て教育普及の緊急最も切なるを見る此際本会は天下に率先して本月二月発布文部省訓令第三号中学校教授細目(ママ)に則り予て通信教授法を以て来たりたる各学科に一大刷新を加え(略)本会事業の進行と共に其完全を期せんとす」とある。

また、明治36年2月10日号の広告には「本会は明治二五年の創立にして由来十数年国家的教育の趣旨を目的として常に学制の変遷と相応じて一意高等普通教育の普及を計」ってきたと改めてその趣旨を強調し、「中学校五箇年の課程を満三年」から「二ヶ年半」の課程に縮小したこと、機関誌『青年機関』を発行したことなどが記されている。会員数は、五万八千余名に達したと記されているが、明治38年を境として『中学世界』の広告欄から消え、大正3年に刊行される『少年倶楽部』の広告欄にも掲載されることはなかった。

3. 中学講義録の革新と普及

(1) 東洋大学中学講義録の場合

明治30年9月改正の東洋大学の前身、私立哲学館「館外員規則」は第一条において「本館二通学スルコト能ハサル者ノ為メニ自宅独修ノ便ヲ計リ館外員ノ制ヲ設ケ毎月四号合本七冊尋常中学科、高等教育学科、高等宗教学科、漢学専修科及仏教専修科、五種ノ講義録ヲ印刷シテ之ヲ頒ツ」とある¹⁵⁾。ここに哲学館は五種類の講義録を刊行していたことがわかる。そのなかの一つに尋常中学科講義録が含まれている。

東洋大学の中学講義録は「私立東洋大学附属中学科校外生規則」の「中学講義録改正旨趣」(年度不明—明治40年頃と推定)によれば「明治二十七年日清戦没のとき、中学講習会を開設し、爾来十有余年毎月二回講義録」を発行したとある¹⁶⁾。

「尋常中学科講義録ハ本館予科(中学科)ノ参考書文部省所定ノ尋常中学科ノ講義ヲ編輯ス之ヲ読修スル者ヲ中学科館外員或ハ一名中学講習会員ト称ス」

ここから、哲学館の尋常中学科講義録は中学講習会の手により、「予科(中学科)」の参考書

として刊行されたものであることが確認できる。

哲学館は明治31年京北中学校を設立すると同時に、中学講義録は、明治32年の「私立哲学館館外規則」によれば「本館予科及京北中学参考書」とすると明記された。

また同規則第15条には「中学科館外員ニハ初学年半年分既納者」には「中学講習会徽章」を授与し「後学年半年分既納者」には「帽章」、「試験ヲ受ケタ」ものには「別種ノ会員章」、「各学年通読者ヘハ通読章」を授与するとうたわれている。また、第19条では「館外員五名以上アル場処ニハ中学科講習会」を設けることができるとされた¹⁷⁾。

この講義録が少年雑誌に広告されるのは、『少年世界』の明治32年4月1日号においてである。そこには「尋常中学科講義録」の名で広告が掲載されている。その広告によれば「本講義録は文部省所定の中学全科を自宅にて独修し或は中学入校試験の準備を為さんとするものの為に発行せり」とあり「一年間全部四十八号合本二十四冊代金参内五十銭外に束修」を要するとある。

この広告の内容から、この中学講義録は「本館予科」と京北中学の参考書としてだけでなく、「中学入校試験」のための受験準備書を目的として発行されたことがわかる。

しかし、この広告には、「中学講習会」の名はみあたらない。その名が広告にあらわれるのは明治38年10月10日号の『中学世界』の広告に初めて、発行所を中学講習会として「京北中学教師講述中学講義録」が掲載される。この広告には「毎月四号宛発行、会費三五銭」とあるのみである。

この講義録が改正されたのは明治39年のことである。先の「中学講義改正旨趣」は次のように述べている¹⁸⁾。

「教育の聖旨を奉載し、国民に須要欠くべからざる中等教育の普及を図りしが、会員の数、日に月に増加し、已に幾万の多きに及べり（中略）窃に所期の空しからざりしを喜び、益々奮励して其内容を修正増補せしこと已に幾回、（中略）今や又新に各科に造詣深き学士若しくは知名の大家を講師に嘱託し、編輯機関を一新し、名を新式中学講義と改め、三十九年十一月五日発刊の第一号よりは、全く斬新の材料を取め、科目には、日常必須なる、法制、経済、簿記の数科を加へ、巻尾には、雑報の一欄を増して、内外の新奇なる學術上の事項を紹介しつつあり（中略）希くは世の青年諸子、多種多味なる本講義録に就いて、日常必須の高等普通学を研修せんことを」

この講義録は「初学年」と「後学年」に分かれていた。この「両学年の通読証を有する者は、其証授与の後、本講義録全科卒業試験を受けることを得」、「初後両学年の試験に合格したる者は、其の成績により、東洋大学第一年級第二種生へ無試験にて入学を許す」ということが書かれている。

しかし、現在の調査の段階では、この講義録がどのくらい発行されたのか、どのくらいの購読者がいたのか、どのくらいの人たちがこの講義録を利用して、どの中学校に受験し・合格したのか、どのくらいの人が「東洋大学第一学年第二種生」として無試験入学したかは不明のままである。

現在の調査の段階であるが、この講義録の広告が少年雑誌から消えていくのは『中学世界』の場合、明治41年である。その後の活動の状況については今のところ不明である。

ただ一つ指摘できることは、この東洋大学の中学講義録は先に検討した大日本中学会の中学

第2章 中学講義録の世界

講義録とは違い東洋大学という学校を母体として発行された講義録であったところに特色がある。したがって、この講義録は、「予科」や京北中学校の参考書としての役割をもっただけでなく教科書としての役割も果たしたことは容易に想像される。しかし、明治39年に新式中学講義録と改称してから「希くは世の青年諸子」に「日常必須の高等普通学を研修せんこと」¹⁹⁾として講義録発行の目的を拡大した。ここにこの講義録の読者対象が拡大していたことを推測することができる。

(2) 早稲田中学講義録の場合

早稲田中学講義録は、明治39年4月発行されるが、その前身となったのは、明治35年4月創刊の『中等教育』という雑誌であった。この雑誌は「現今の中等教育に資し、中学程度の学生等の修養勉学に便せんが為め、今回出版部内に、中等教育を設け、広く会員を募集して毎月一回『中等教育』と云える講義録、雑誌の二面を兼ねたもの」²⁰⁾として創刊された。会員数は「大体九千名」²¹⁾いたといわれている。

中西敬二郎氏は「東京専門学校創立後、いくばくもなく所謂 University Extention としての講義録が発行されたように、今ここに早稲田中学校が設立されると、同じ構想の下に Junior School Extention ともいふべき『中等教育』なる冊誌が生まれるのも当然と云わなければならないだろうと」²²⁾と述べている。この中西の弁によれば、『中等教育』は中学校拡張運動の一環として刊行されたことが分かる。

この「『中等教育』の編集に全力を注いだ」のは坪内逍遙であった。当時、坪内は早稲田中学校の教頭であった。この『中等教育』は「(1)専門大家の確實多趣味なる講話によりて、中学程度の学生に穩当確實なる倫理上の知見を与へ其品性を高むること。(2)確實なる科学上の知識を得せしめること。(3)高尚なる趣味を養はしむること」²³⁾等々を特色として掲げている。

このような雑誌を前身として早稲田中学講義録が刊行されるのは4年後の明治39年である。

早稲田中学講義録の責任者も坪内であった。同講義録第一号には次のような発刊の辞が記されている²⁴⁾。

「光荣ある我が日本帝国は、今や鉄血の中より出でて平和の大奮闘期に徒れり。我が同胞国民たるもの、果して何等の覚悟を以て之に処せんとする歟。(略)而して此根底たり基礎たるものは実に夫の国民中等教育に非ずや。熟々我が中等教育の現況を觀るに(略)国家の經濟はよく之に應じて中等教育を授くべき中学校の設備を充分ならしむるに足らず、且つや戦後国民生活の状態は、子弟教育の資を給するの余裕に乏しきものを出すこと漸く多からんとす。(略)今にして此が救治策を講ぜんば、啻に戦勝国としての実に収むる能はざるのみならず、国家の根柢たる元氣漸く沮喪の基礎為に危殆に瀕するに至るかも測るべからず。」

また、『早稲田大学百年史第二卷』は早稲田中学講義録の発刊について次のように述べている²⁵⁾。

「『早稲田中学講義』の発刊は明治三九年四月で、奇しくも早稲田中学校創立満十年に相当する。当時、年々小学校を卒業した青年が非常な勢いで社会に送り出されているにも拘らず、中学校の設備が不足している上に、種々な境遇に妨げられて小学校以上の教育を受けられず、向学心を抱きながらもその目的を達することができない者が激増する有様であつ

表 『早稲田中学講義』学課表 (明治三十九年九月)

録目	第一学年		第二学年	
	科目	講師	科目	講師
修身	道德の要領	文学博士 坪内 雄蔵	倫理学	講師 浮田 和民
国語	時文及び近世文 美文評釈	講師 永井 一孝	今古文及び古文 韻文、和歌、俳句	講師 永井 一孝
漢文	単句短文、近世・近古・ 古文	文学士 丸井 圭治郎	記事論説、古文及詩	講師 牧野 謙次郎
国文法	仮名遣品詞分類	文学士 横地 清次郎	品詞各論、送仮名、句説法	文学士 横地 清次郎
外国語	英語発音・読方 英語訳解 英語文法 清語発音・会話	グ・スター・オ 岸本 能武太 講師 増田 藤之助 講師 宮井 安吉 講師 青柳 篤恒	英語読方・会話 英文訳解 英文法、作文 独・仏・羅・希語発音及 び文字	グ・スター・オ 岸本 能武太 講師 増田 藤之助 講師 宮井 安吉 (各専門家)
歴史	日本史 世界史(東西両洋)	文学博士 原 秀四郎 文学士 高桑 駒吉	日本史 世界史	文学博士 原 秀四郎 文学士 高桑 駒吉
地理	日本地理 外国地理	農学士 志賀 重昂 理学士 山上 万次郎	外国地理 地文学	理学士 山上 万次郎 理学士 石川 成章
数学	算術 幾何	理学士 吉田 好九郎 理学士 遠藤 又蔵	代数 三角法	理学士 吉田 好九郎 理学士 遠藤 又蔵
博物	植物 動物	理学士 草野 俊助 理学博士 石川 千代松	鉱物 生理衛生	理学士 滝本 鏡三 講師 糸 左近
物理化学	物理学	理学士 田中 三四郎	化学	理学士 池田 清
法制経済	法制	法学博士 有賀 長雄	経済	法学博士 添田 寿一
簿記	簿記学の原理等	商業学士 吉田 良三	帳簿組織及記入式等	商業学士 吉田 良三
科(参考課)	絵画の栞(挿画) 農業大意 文学入門 天界叢話 世界各国学生生活	講師 川端 玉章 農学博士 横井 時敬 文学博士 坪内 雄蔵 理学博士 横山 又次郎 講師 中島 半次郎	工業大意 絵画の栞 農業大意 美術工芸談 世界諸宗教	工学博士 阪田 貞一 講師 川端 玉章 講師 石川 文吾 講師 島村 滝太郎 講師 土屋 詮教
雑録	新聞雑誌一覽、其他有益なる論説記事、並に挿画、質疑応答、懸賞文、通信欄、自修法			

〔明治四十年度早稲田中学講義録之栞〕 『早稲田学報』明治三十九年九月発行臨時増刊第一三九号(二五頁)

た。こうした欠を補うため、我が学苑は先に中学校を設立したが、この大勢を補足するには九牛の一毛にも過ぎず、しかも地方の青少年の要望を満たすべくもなかったので、ここに通信教授により中等普通教育の徹底を期することにした。本講義録の特長は、もとより中学校教授細目に準じ、大学教授ならびに専門教育家が各学科を講義を担当したばかりでなく、実際社会において必要な学問芸術を加味するのは勿論のこと、新学説の紹介や時事の研究に関する項目を加えた点にあった。そして第二十五表の学科表に示されている学科の配当は、中学校卒業程度の学力を二年間で修得せしめるよう配慮されている。」

『中学世界』に早稲田中学講義録が広告されるのは、明治39年4月10日号においてである。ここには早稲田商業講義録と同列に次のような宣伝文句を掲載した。

「『早稲田中学講義』は本年の創刊に係り平易多趣の講義を以て何人も容易に中学課程の学

第2章 中学講義録の世界

力を養成するを得しめ以て他日活社会に立つ者の成功の基礎たらしめんとす」

この後に「中学科課目」一覧を掲載した。倫理は坪内雄蔵にはじまり中学科の科目が並び錚々たるメンバーが講師として名を連ねている。そして最後に各国中学生生活の欄を設け中島半次郎が担当している。講義録は毎月二回発行し「二ケ年卒業の制とす」と書かれている。月謝は四〇銭である。

中学校の修業年限五ケ年を二ケ年で卒業というのは余りにも誇大にすぎるが、一日も早く正規の中学生と同じような教養を得たいと願っている青年にとっては魅力的な広告であったに違いない。

『中学世界』明治40年6月25日号の広告には、「教授法の斬新」を特色の一つにうたい「各科図説其他挿図許多あり」という。また、「知識交換研學策励の爲め同攻者の便宜を計り通信欄を設く」として質疑応答欄を設置し、購読者とのコミュニケーションをはかろうとして努力していた。この時期は大日本国民中学会という強力なライバルが出現したためこのような刷新を計ったものと考えられる。

この広告には、購読者を明確にする宣伝文が載る。それによれば、早稲田中学講義録は「高等小学校卒業、及び中学二年以上の学力あれば独習に適す」という。ここに、学齢はほぼ同一の青年を対象とし、かたや高等小学校卒業後何らの職業に就いているものと、一方中学生の学習参考書としての役割を果たそうとしていたことがわかる。

当時の早稲田中学講義録はどのように評価されていたのだろうか。

高柳曲水は『小学卒業立身案内』のなかに「中学科の自修方法」という一節を設け、東京朝日新聞評（明治40年9月28日）を掲載した²⁶⁾。

「怪しい講義録とは日を同うして語るべからざるものがある講義も整つて居れば親切にも出来て居るが、どちらかといふと雑誌じみて御馳走が多過る。一例を挙げると最初から世界史に日本史が並んで掲げられ一年に物理があつて支那語があつて美文の講義があつて二年目から朝鮮語露西亞語といふやうなもの迄這入る有りさま程度が高いので實際講義録を必要とするものには非常な骨折を以て読んでも解らぬといふのが多い。而し之を若し中学生の参考書とするなら現在では最も適当なものであらうと思ふ。講義録の目的に適へさすには少しく程度を低くする必要がある。」

この新聞の評からもわかるように「雑誌じみた」講義録としての印象が深かったことがわかる。すでに述べたようにこの講義録自体が『中等教育』を前身として出発したことをあらわしている。また、「中学生の参考書とするなら現在では最も適当なもの」とあるように、中学生の学習参考書としての認識をもたれていたことをこの新聞は伝えている。

中学生の参考書としての役割を濃厚に抱いていた点は先に検討した東洋大学の中学講義録と類似している点である。また、類似という面では早稲田中学講義録も東洋大学の中学講義録も学校を母体としている点である。すなわち、学校を母体として刊行された中学講義録は自分のところで経営している学生の学習参考書として発行されたところに共通点を持っている。

大正3年7月10日の『中学世界』に掲載された早稲田中学講義録の広告は次のようにうたう。

「看よ 大特典 記念メダル贈与、大学無試験入学、卒業及び修了証大学学費給費」

卒業証・修了証とならんで大学無試験入学という宣伝文句は独学青年の野心をくすぐらずに

はおかなかっただろう。

ところで、この講義録を利用した人々の学歴を知る資料はいまのところ発見されていないが、筆者の購入できた大正14年版『早稲田中学講義録第33回』をみると、中学生の学習参考書としての講義録というより独学者の学習媒体としての役割が大きくなっていてのではないかと推察される。この講義録の後部には、毎回というわけではないが「新天地」という欄が設けられ、読者からの投稿記事が掲載されている。この「新天地」は早稲田中学講義録の機関雑誌の様相を呈している。そのなかには、たとえば、「私は田舎の苦学生（受験記）」と題して寄稿した宮崎県のTのように「私の境遇は十二年一月号の新天地、『独学に志した動機と境遇』に応じて詳しく身の上を書いたことがありました」と述べている。

このTは、「講義録にて勉強の傍、自己の農業に対する知識の貧弱さを痛切に感じ（中略）本年六月小学校教員農業科専科正教員へ県内受験者三名中の一人として受験致しました」という。そして合格後「中等学校教員農業科予備試験に応試」²⁷⁾している。

このように小学校卒業資格という学歴しかもちえない独学者たちが講義録で勉強し中等教育の知識を習得しつつ、なんらかの資格試験を求めて学習する装置への変化していることがわかる。

この「新天地」には各地方の早稲田中学講義録購読者が集まって作ったサークル「同攻会」支部の活動記録が掲載されている。

たとえば徳島支部の場合はその規約によると「本会は大正十二年三月十八日第三十五号に拠る本部認可を受け早稲田同攻会徳島支部を設立す」とある。設立目的は「親く登校して講義を聴取する能はざる人の為本部発行する講義録にて課程を学修する人々が一定の場所にて互に研究するを目的」としている。この支部の事務所は個人の家になっており、入会資格は「早稲田大学校外生証票」を持っているものとされた。

その規約には「特典」も明記されていた。たとえば「校内生若くは聴講生たらんとする時は本校の入会金を免除せられ相当専門学課を試験の上当該専門部第二学年へ編入す」というものであった。このように早稲田大学の専門部第二学年に編入できるチャンスがあることがうたわれていた²⁸⁾。

このチャンスを利用した人に、たとえば早稲田大学政治経済科生となった高橋がいる。彼は次のように回想している²⁹⁾。

「大正十一年村の小学校を卒へましてより、茲に満三ヶ年を経過致しました。逆境の然らしむる所、憧れた中等の学究への一日も行つたことなく、不満の念に堪え難く、早大の校外生となつたのは、今を去る三年前即ち小学校を卒へた其年のことであつた。（中略）苦境に遭遇するや、其の都度自己の心内に生じ来つた幼たる羨は、云うまでもなく……制服を着し、制帽を戴いて……何不自由なく学窓にあつて、所謂敬虔な夢想に過す幻影其のものであつた。羨の反映は奮発となり、教員の検定試験などを唯、刺激として励んだものだ。昨年四月、或る動機の下に、校外生卒業者の資格を以て、早大専門部政治経済科の入学試験に応試しました所、僥倖にも合格するの幸栄に浴し、校内生となつた。」

この回想からもわかるように、「中等の学究へも一日も行つたこと」のない人が早稲田中学講義録を利用して勉学していたことがわかる。

表8 校外生(講義録講読者)数一覧表

年 度	政治・経済科	法律科	行政科	文学科	歴史・地理科	商業科	中学部	高等国民教育科	高等女学科	計
明治23年	890	701	401							1,992
24	453	411	251							1,115
25	573	438	275							1,283
26	765	716	299							1,780
27	894	857	306	965						2,057
28	899	764	363	894						2,991
29	1,003	1,974	717							4,588
30	1,565	2,157	1,001	1,537						6,260
31	1,995	2,372	2,113	1,335						7,815
32	2,696	3,191	2,991	1,335						10,213
33	2,501	4,066	3,198	2,791						12,556
34	2,779	3,402	2,422	3,181	1,639					11,784
35	2,667	3,068	3,747	文学科 2,509 教育科						13,630
36	3,601	3,718	3,247	3,225	2,615					16,406
37	3,746	3,798	3,056	3,764	3,010					17,374
38	4,173	3,274	2,184	3,694	3,022	5,345				21,692
39	3,512	3,297	1,776	3,159	2,459	8,070	6,293			28,566
40	3,014	3,540		3,031	歴 刊	8,809	7,983	3,615		33,534
41	2,834	3,194		2,448		8,626	12,817	3,836		32,790
42	3,034	3,537		2,354		7,951	12,078	2,954		28,768
43	2,978	3,590		2,269		5,449	11,528	歴 刊		31,406
44	3,445	3,596		2,867		6,094	15,404			33,496
45	3,655	3,792		3,114		8,102	14,833			31,971
2	3,606	3,717		3,365		4,068	17,215			40,707
3	4,108	4,363		3,914		6,308	22,014			49,610
4	3,791	4,034		3,395		5,784	32,606			55,644
5	4,262	4,982		4,184		7,047	35,219			49,275
6	3,248	3,620		3,520		7,680	31,207			55,980
7	3,157	3,226		3,096		11,280	35,221			88,805
8	7,854	6,930		5,916		22,800	45,305			100,939
9	12,058	9,355		7,647		23,839	48,040			109,187
10	11,687	10,251		9,697		24,558	52,994			118,974
11	12,753	12,061		13,302		19,206	61,642			136,220
12	11,180	13,910		14,560		21,580	57,180		17,810	164,627
13	12,089	16,329		23,265		21,662	59,648		31,644	155,593
14	12,207	15,241		21,280		19,106	57,886		29,873	142,381
15	10,993	14,405		19,275		17,242	52,138		28,328	
計	166,675	181,827	28,347	180,868	12,745	207,606	689,251	10,405	107,655	1,648,379

中西敬二郎前掲論文(2)より抜粋

この回想には「付記」があり、そこには「現に校外生より進んで本大学に入学された方は百弍拾余名ある。本年参月参拾余名の卒業生を送りだすことになった」記されている。

では、校外生はどのくらいいたのだろうか。「早稲田大学出版部小史」によれば講義録購読者のうち「中学科」の校外生は第8表のようにになっている³⁰⁾。

ここには、明治39年から大正15年迄の22年の校外生の推移がわかる。明治39年は6,293人、明治41年には12,817人と二倍に増加している。大正2年には17,215人、翌年には22,014人、翌々年には、32,606人となる。大正8年には45,305人、11年には52,994人、12年には61,642人と発行当時と比較すると10倍強の増加である。この22年間の総計は689,251人となった。そして、早稲田中学講義録は「大正二年より（中略）春秋二回募集の制度」になった。このことは、大正期にはいると講義録の需要が高まったことを意味している。それだけこの講義録を求めて勉強しようとする独学青年がこの講義録を利用する頻度が増加したことを物語っているのではないだろうか。

したがって、中学生としての参考書としての役割というよりも、とりわけ1920年代にはいると中等学校を経由しない人たちの中等教育の知識や教養を求めるための学習媒体になっていったのである。

大正十四年二月早稲田大学出版部は『早稲田大学六大講義録要覧読書眼』を出版した。そこには「民衆大学を標榜する我が早稲田大学は、是に見る処あつて、欧米諸国の例に倣ひ、校外教育の制を設けて講義録を発行し、民衆文化普及の先駆をなした。（中略）爾来校内教育と並んで校外教育を是れに依つて施し、業を卒へたもの既に百有余万に達し、社会に頭角を現したのも決して少なくない、近年講義録の発行部数頓に増加し、未曾有の盛況を呈するに至つたのは、要するに（中略）講義録其ものの価値と実質とが、全く他発行のものを選を異にせる為といはざる得ない」と述べ、早稲田大学講義録の大学教育普及率の成功をうたっている。そのなかで中学講義録については、「小学校卒業者が、独学によつて、中学全科の課目を履修し得るを目的とし、文部省教授細目によつて編輯するとともに、特に実際知識の一斑を解せしめんが為めに、実業課目、特別講話を加へ、又現代青年が興味を中心となれる無電、活動等の自然科学上の新知識を加へ、且つ自修独本、雑誌「新天地」を附録として独学者に便じている」と述べている。またこの中学講義録のほかに「商業講義」・「高等女学講義」を発行し中等教育講義録の体裁をか備えたことがわかる。

ここに「独学」の二文字が明確にうたわれたところに、発刊当初の目的とは違う大きな変化があった。

そのことを物語るかのように独学者の学習を助ける事業を早稲田は行っている。

先の『要覧読書眼』によれば、早稲田大学の「通信教授上の三大事業」は校外生大会・夏期講習会・地方巡回講演であった。

校外生大会は「全国校外生を毎年一堂に会して執筆の諸講師に親炙せしめ、又同攻相互の親睦に資するを目的とし、一昨年より、東京大阪の両地にて隔年毎に開き来たり（中略）講義録に執筆さるる大学教授其他十数名の講師出席して校外生諸君の為に講演せられ、諸君の之に出席する者万に余る盛況を極めた」という。夏期講習会は「毎年夏期、大学の講堂を開放し、第一流の学者教育家を聘して、講義録に関係ある諸学科を講ぜしめ、一般講義録購読者諸君をし

て無料聴講せしむる」とある。地方巡回講演は「全国主要の地方」に講師を派遣し講演会を開き購読者は無料で聴講できるものである。「其の一回を一昨秋大阪、京都、神戸、名古屋各地」で開催したと報じている。

これらの活動は後述する大日本国民中学会の活動と類似している。早稲田の場合は、大正10年代に入ってからこのような活動を行っているが大日本国民中学会の場合は明治38年より講演会等の活動を行っていた。早稲田のこのような活動はこの資料から推測するに、大正10年代にこの種の活動が行われていたことは確認できたが、それ以前の状況については定かではない。

では早稲田中学講義録で学習していた人たちは、何を目指していたのだろうか。

まず、この講義録を学習することによってどのようなメリットがあったのだろうか。

講義録購読者には以下のような特典が与えられていた。

「大学入学資格

講義録卒業生は考査を経て本大学専門部入学の特典あり、特に政治経済科、法律科の卒業生は特別試験を経て専門部当該科第二学年に編入することを得。

大学入学金免除

本大学及び関係学校入学に際し、特に入学金を免除せらる。

大学学資金給与

卒業試験の成績最優等の者は、特に銓衡の上給費生として本大学に入学せしむ。

卒業証、修業証授与

講義録修了者には修業証を送り卒業試験合格者には卒業証を送る。

部友、準校友、校友推薦

講義録修了者は本大学校外教育部友とし、政、法、文各科卒業者は本大学準校友とす。準校友は校友会の推薦あらば、本大学推選校友たることを得。」

この他に大学図書閲覧・質疑応答等が自由にできるという特典があった。先に紹介した高橋はこの特典にあずかった人物であった。

次に専検などの検定試験に合格して中等学校卒業資格取得を目指した人々もいた。

先の早稲田大学講義録の特典にあずかった人物に、大正14年『独学者の進むべき道』という独学者のためのガイドブックが刊行した、吉村正がいる。

吉村は「此書を世の恵まれざる独学の青年に捧ぐ」と書いている。「序」は、早稲田大学校外教育部長青柳篤恒が書き、著者を紹介している³²⁾。

「本書の著者吉村君、素と苦学力行の人、早稲田大学の校外生より身を挺して同大学に入り、最も優等なる成績を以て政治経済学部を卒業し、現に同大学政次経済学科講義録の編輯に従事せられて居る。」

著者吉村は「会々私が早稲田中学講義録の編輯に携はり、質疑応答の欄を設けて汎く読者諸君の質疑に答える様になりましてからかなりの月日を読みました」と述べている。吉村は早稲田大学講義録および早稲田中学講義録に深く関わっていた人物であることがわかる。彼はこの書物において「少なくとも、中学講義録購読者諸君に適応しい程度の立身法は、全部之を網羅して、是非諸君の参考に供し度い」³³⁾という目的のもとに書かれている。この書物は第一編を検定試験として、専検をはじめ裁判所書記登用試験・小学校教員検定試験・森林主事特別任用試

験・商業実務員学力検定試験など10種類の試験の内容を解説し、続いて学校として官費学校を12校紹介している。さらに各検定試験問題を掲載する。そして「独学受験記」を8例掲げている。すなわち、「校外生から高文試験突破」・「普通試験合格記」・「血類三年有半高文資格試験を突破」・「専検に合格する迄」・「尋常小学校本科正教員受験記」・「商工従事員学力検定試験を受けて」などである。

この独学者吉村の独学案内の目次構成からも明らかなように検定試験合格のための受験準備書として講義録を利用する人たちがいたことは推測される。

例えば、早稲田中学講義録第三十三回第七号には「戦の跡を顧みて」という受験記を書いた金原は次のように述べる³⁴⁾。

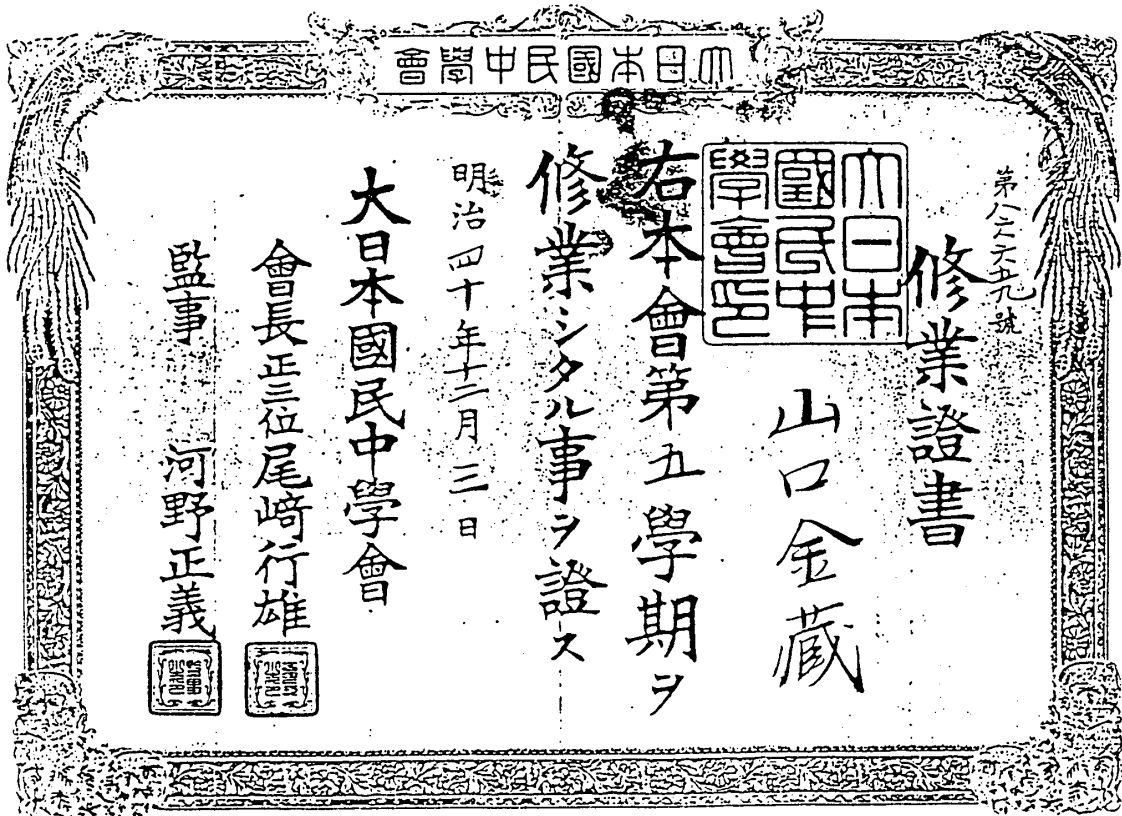
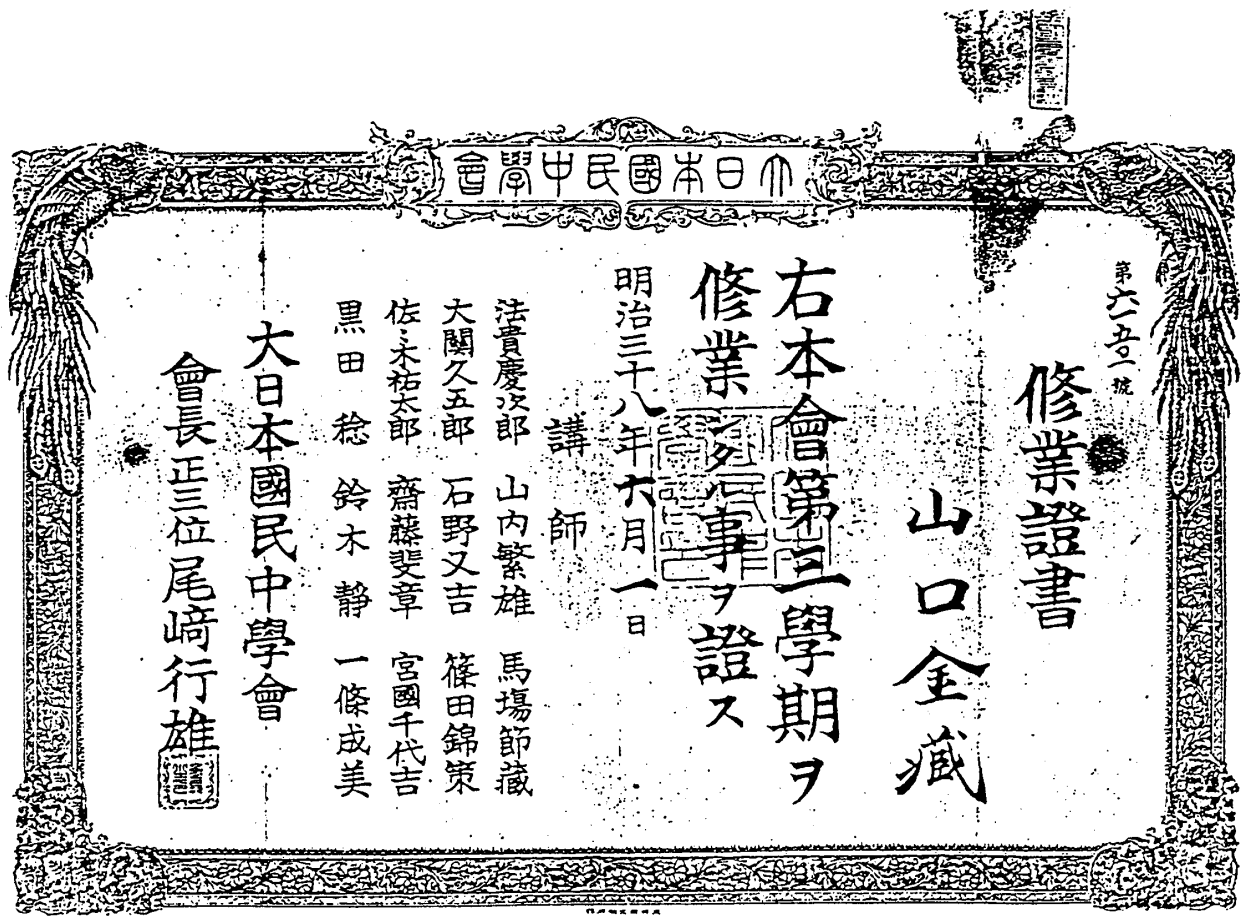
「私は小学校を卒業して直ぐ家庭の都合上店の小僧としてH市の或る肥料店に住み込んだ。其所で五年程の歳月は何の顧慮を許す暇もなく過ぎた。然し大正十年の秋、病を得て、店の方が不首尾に終り、他に向はなければならなくなつたが、知識が如何にも貧弱で、到底将来の画策が立たないので大いに煩悶したのであつた。時既に齢を重ねる一九、小学校時代の友人の誰彼は己に白線帽に得々として居た。(中略)然し、其時、天の一角に希望の力強き光が輝き初めた。夫は世の早稲田中学講義録の存在を知つたのである。(中略)第一号の配布を受けた時に、大正十一年五月はじめて、書籍を手にした。(中略)此の病気のため、卒業試験は遂に受けられなかった。(中略)次に私の感じた専検受験の方法を僭越乍ら少し述べよう。まず講義録を大いに活用する。(中略)講義録を熟読し、能く己のものたらしめたならば、次に中等の現行教科書を是非通覧する必要がある。講義録は其性質上復習にはもの足りぬ。(中略)けれども講義がすまない内に教科書を読むには及ばない。二ケ年間の校外生としての本務を十分に尽して後、初めて教科書を見るが結局平坦な捷徑である。(中略)次に私の使った参考書を紹介する。国語塚本氏「国文解釈法」木村氏「現代文解釈法」漢文塚本氏「漢字解釈法」数学藤森氏「学び方考へ方と解き方」全部、物理「山田徳佐「計算問題集」英語「クラウンリーダー三。ラングエイヂ四。本大学教授山崎氏「新々英文解釈法」、「自習新英文典」。岡田実磨氏「和文英訳要訣」、「英文和訳要訣」他の学科は用ひなかつた、又必要もないと思ふ。」

ここに講義録の機能が明確にでている。講義録は中等学校の教科書を利用するための学習書としての役割であること、しかし、それだけでは専検には合格しないこと、したがって参考書等を利用しなければならないことである。つまり、中等程度の学習内容を学ぶためのイントロダクションの役割をはたすにすぎないということがわかる。

このように独学と資格試験はわかちがたく結びつき早稲田中学講義録がそれらの資格試験に合格するための学習媒体になっていたことを物語っている。吉村が講義録購読者の質疑に答えた経験からどのような質問が多かったかは容易に想像がつく。

昭和戦前期の早稲田中学講義録がどのような発展を遂げたのか、この問いに答える資料は未発見である。

ただ第五十回事業報告書(自昭和一九年一月一日至昭和二〇年五月三十一日)には「当部今期の業績は極めて不良なるも極度に経費節約を計り(中略)是を講義録に付て見るに印刷能力の極端なる低下の爲め印刷の遅延と醜翼の空襲のため印刷所に於ける罹災等の原因により今



期は講義録の刊行僅少にして、四〇、四一二回刊行したるのみなれば業績香しからず」と報告している³⁵⁾。

そして、敗戦を迎え事業は一時中止を余儀なくされた。

その後「商学」・「中学」・「高等」講義録に限って発行を続けたが学校教育法施行にともない通信教育制度が法制化され実施されるにしたがって早稲田大学出版部は校外生募集を停止し、長い早稲田講義録の時代に幕を引いたのである³⁶⁾。

(3) 大日本国民中学会の中学講義録の場合

一方、明治後期から大正・昭和戦前期を通して中学講義録の一大シェアを拡大普及させた中学講義録出版社は大日本国民中学会である。この出版社は先に検討した、東洋大学や早稲田大学のように学校を母体としたものではなく、あくまで個人経営の中学講義録出版社という特徴を持っていた。

大日本国民中学会を創設した人物は、河野正義である。河野は明治12年茨城県行方郡に生まれる。17才で上京、のち出版社に住み込み各地方に行商にでる。そんななか、地方の青年が学問ができない状況を知り、中学講義録の発行に踏み切ったとされている³⁷⁾。

河野が「各種の事情により中等学校へ入学し得ざる青少年子弟に対し通信教授の方法に依り中学校全課程を修了せしむる」³⁸⁾ことを目的にして大日本国民中学会を創立したのは、明治35年2月11日のことであった。

ここに大日本国民中学会の沿革を知る一つの資料がある。それは、昭和15年、勝田穂策が編纂した『財団法人公民教育会（通信教育部）大日本国民中学会創業四十年史』（大日本国民中学会発行、全47ページ）である。この沿革史をたよりに素描してみよう。大日本国民中学会はどのような目的で中学講義録を発行したのだろうか。そしてどのようにして発展していったのだろうか。

河野は、当時、東京市長であった尾崎行雄を会長に推し、自らは主事となり「東京高等師範附属中学校教諭其の他の教育関係者に講師を委嘱し」講義録の編纂に着手した。5月には機関誌『日本之青年』を発行。そして、7月には「中学講義録第1年第1号」を発行した。科目は倫理講義、国語漢文講義、歴史科講義、地理学講義、博物講義、物理学化学講義、幾何学講義、算術代数学講義、英語科、法制経済、画法講義の11科目、講師は東京高等師範学校教諭8名、東京府第二中学校教諭1名、他1名であった（2頁）。

中学講義録の「発刊の趣旨」は「中等社会は国家の中堅に立つ者である」が「翻って今日の実際を顧るに中学校は悉く希望者を収め得ず、講義録と称するものは、或るひは国民的教科書として適切ならぬものが多い、これ本会が講義録を発行する所以である」と述べた。さらに「此の講義は強いて専門科として組織系統に拘泥せず能ふ丈實際生活に裨益ある知識を与へ、完全なる国民的教科を援けんとするもの」であり「此の価値ある講義を適当に方法に学習する校外生は他日生活場裡に馳駆する時其の学識思想に於て決して他の中学生に劣るまじき、固より疑なき所であって本誌の終極の希望も又之に過ぎないのである」と主張した（2～3頁）。

この発刊の主意からみる限り、大日本国民中学会の中学講義録は、資格制度との関係が薄く、「中堅国民」としての完結的な教養を与えることを主な目的としていたのであり、そこに大日本国民中学会と称する所以があったものと思われる。

第2章 中学講義録の世界

大日本国民中学会は、明治36年4月に、それまでの『日本之青年』を休刊して『新国民』を新しい機関誌として創刊した。

「創刊の辞」には、次のようにその趣旨が述べられていた。

新時代の国民たるべき者をして正しき修養を積ましめ社会の実際の知識を得せしめ、更に高雅なる文芸の趣味を函養せしめんが為め、『新国民』はここに生まれたり。吾人の期する所斯くの如きは、スマイルスの所謂『真の人』たらしめんが為のみ。(中略) 国家は剣激の人政権の人を求めむると共に、知育あり品位あり道義ある堅実なる国民を要すること極めて切也諸子乞ふ『真の人』たるの準備をなし修養を積むに於いて敢えて怠る事勿れ(4～5頁)

『新国民』の創刊号には、全10章からなる「大日本国民中学会規則」が掲載されている。それによれば「本会の講述学科は明治三五年二月の文部省令中学校教授細目に準拠し教授方法は米国オハヨー大学最新式教授法を参酌せるものにして尋常中学校各学年を六ヶ月に修了し満二ヶ年半を以て中学全科を卒業せしむ」とされ、学科は「本科一九科」よりなり、入会は「何人も問わず何時にても入会でき」、「青年会夜学会校友会等の名を以て入会すること」もできるとしている。入会金30銭、会費は2ヶ月分以上を納付すべとして、第1学期より第3学期の終わりまで1ヶ月40銭、第4学期より第5学期の終わりまで45銭となっている。

明治40年3月10日の『中学世界』の広告には「正則中学講義」は「中学校一学年を完全に修了せしむる正則の組織」であるとうたった。そして同広告には、「速成科」を設け「速成中学講義録」を発行し、「卒業一ヶ年の短期なるも、豊富な紙数と新式の教授法とに由り、中学全科を学習するに」何の支障もないとうたった。

大日本国民中学会の中学講義録は「正則講義録」と「速成講義録」の二種類が発行されたことになる。

明治40年11月10日の『中学世界』の広告には、朝日新聞の該中学講義録評を掲載した。そこには「新式の教授法」の内容が書かれている。

大日本国民中学会の講義録は他の講義録の欠点を満して最も平易に又最も親切に作られて居る講義録としてはどうしてもこれを第一に推さなくてはならない。第一図解で講義録を助けると云う目的かつ絵をたつぷり入れた事。第二英語図解の説明の如き通信教授で至難のものを種々な工夫を凝らして兎も角もわかるようにしている。第三尽く総振り仮名にして何人にも読みうるようにしている。第四全然文部省令に拠って学科の配置紙数の割宛なども一致している事これら質実親切で誠によいことだと思ふ。

また、「大日本国民中学会規則」で注目されるのは、支部の規定があることである。支部とは「一地方に会員十名以上あるときは支部を設くることを得」というものであった。支部会員の会費は「特待員と同じ」として一般会員より各学期あて五銭割引となっている。会員には「時々支部に相会して講義録を講習を為すべし」と講習が義務づけられる一方、「支部に関する規約を設」けるときは「本会の許諾を受くべし」とされ、支部には「幹事一名を置き優待員又は特待員」を当て「幹事の氏名等は新国民に於て発表する」としている。

特待員とは「入会者五名以上を紹介したるもの」で、優待員とは「一〇名以上」の入会者を紹介したものとされた。明治36年1月第1回推薦本会支部長を発表されたが、そのほとんどは

全国的規模にわたり、しかもその多くは郡部に設置された小学校長であった。また明治38年に発表された優待員は40名を数えていた。

このような大日本国民中学会の「企業努力」は、まずは各地で開催する学術講演会に始まる。明治40年に始まる講演会は同年二月と四月と二度実施し、四月の講演会は大阪朝日新聞社の講演を得て大阪市中之島公会堂で実施する。翌年には東京で新渡戸稲造、竹越与三郎等を講師として開催、翌々年には名古屋において約200人の支部員を集め、講師には三宅雪嶺、鶴沢聰明、本多清一等錚々たる人物を講師に迎えている。さらに明治43年4月には京都、静岡、5月には大阪、10月にはまたもや静岡で講演会を精力的に開催している。

その間、同年六月には「女子必須の中等程度の学芸技術を修得せしむる」ことを目的として大日本実修女学会（大正9年10月大日本通信高等女学校と改称）を新設し下田歌子を会長に推している。また明治43年には卒業生の中から5月に2名と9月に1名を学術研究のためアメリカに留学させている。さらに、四四年には会の顧問を次のように改めた。そのメンバーは以下の通りである。

会長	尾崎 行雄（東京市長）
理事	河野 正義
監事	本多 精一（東京日々新聞主筆）
	清 崙太郎（衆議院議員）
顧問	新渡戸稲造（第一高等学校長）
	岡田 良平（文部次官）
	和田垣謙三（東京帝国大学教授）
	浮田 和民（早稲田大学教授）
	三宅雄二郎（日本及日本人主幹）

編集主幹 生田 長江

明治45年8月には関西支局を京都に設立。11月、講演会を京都市と大阪市で開催、講師には和田垣謙造等を招いた。

このように各界の有名人の名前を利用することで会の組織をオーソライズする方針は一貫して見られる特徴である。同年1月には「寺内、後藤、小松原三大臣より賛辞を呈せられる」たことは特筆される。寺内とは、時の陸軍大臣寺内正毅のことであり、後藤とは通信大臣後藤新平、小松原とは文部大臣小松原英太郎のことである。

では、それぞれの大臣はこの中学講義録についてどのように述べていたのだろうか。

まず、寺内は次のように述べている（7頁）。

今日中等教育は何人も受くべきものに候も諸種の事情により中学校に入学すること能はざるもの不少幸に貴会の如き通信教授の便法あり軍隊に講習を重ね以て知識を進め道徳を高むるを得ば邦家将来の為め慶賀すべき事被存候

次に、文部大臣小松原の弁を聞く（8頁）。

『中学講義録』は内容斬新にして懇切世の青少年を裨益するところ少なからざるのみならず、数次有益なる図書を全国小学校に寄贈し或るいはまた適宜全国各地に於いて学術講演会を開催して地方民の向上に資する等まことに民間教育機関中の權威たり。（略）今回従来

第2章 中学講義録の世界

の講義録に一大改革を加えられ全国小学校卒業生中前途有為学ばんとすれば資無く時無きの少年に研学を勸奨せんとする由、敢えて全国小学校無員各位に是を推賛する次第也
後藤は次のように言う（9頁）。

文明国々民たるの教養を得せしむるは寔に重大なる事業なりと言えども教育の施設容易に是に伴はず即ち理想的なる民間通信教育機関の出現を必要とする次第（略）立憲国々民として恥かしからざる人物の養成に努力せられつつあるは大いに我が意を強うする次第（略）通信従業員にも大いに其の独習を要望する

このように、陸軍大臣である寺内の「軍隊に在りて服する者」への着目、「前途有為」であるが「資無く時無きの青年」への文部大臣の言及をあわせて考えた時、これらの発言は「資無く時無」ければ進学できない中学校教育制度が確立した状況のもとで、そうした差別的な制度への不満が広く青年たちに共有されていたこと、そして、それが体制側にとってさえ見過ごしえぬ問題であったことを示しているとは言えないだろうか。

さらに、この会は大正2年1月兵庫で講演会開催、6月には遠藤隆吉、山内繁雄両氏を学監に推した。4年4月には、創立者河野正義、衆議院議員に当選。第3回海外留学生として、2名をアメリカに派遣。5月には大阪で講演会、京都では講義録補習会を開始。10月には支部幹事63名を表彰している。

このような活動が展開されているなか大正2年1月11日の『中学世界』の広告には「今の世の中は、万事が秩序定まり、総てが組織的になっている」、「何業に就くにも中等教育だけは完全に修めて、常識の円満なる発達を計らねばならぬ」とある。また大正3年4月1日の広告には、「中等教育は常識の基礎である」と明言している。

しかし、一方で、大正4年10月22日の『少年倶楽部』の広告には、『幼年学校、師範学校、中学校、高等女学校、実業学校の入学試験に及第せんとせば補習科講義録に就いて講究せられよ』とうたい「毎月二回発行、六ヶ月卒業」としている。

越えて5年3月には会員指導講習会を開催、6年10月には博物科実験指導を開始し、講義録だけでは学習しきれない科目には教室授業も行うようになる。

7年にはいと、関西方面の会員のために実地指導講習会を開始している。また同年7月には、井上哲次郎を顧問として迎えた。8年には、全国視学招待会が28回を数え開催された。11年には大日本国民中学会高等予備校設置の件が認可される。

しかし、12年9月1日におこった関東大震災によって事務所全部器具機械の一切を焼失。だが、10月には仮事務所を新設。しかも、高等予備校の授業は暁星中学校で開始している。さらに全国の会員会友は「大日本国民中学会復興後援会」を結成した。13年6月には高等予備校校友会が創立され、8月には関西方面会員会友大会が開かれている。また、14年9月には専検合格者の慰労激励会を行なわれるようになっていった。

大日本国民中学会が大正期後半になり高等予備校を開設し、しかも専検合格者の慰労会を行うようになったことは、この会が受験準備機関としての性格も合わせ持つようになったことを意味している。明治期には、三人の大臣の言葉からも伺われるように、中学講義録は学歴と資格の問題とは関係が薄く、むしろ補習教育的側面を重視していたことを想起すれば、これは大きな変化と言えるだろう。

大正時代が終わりを告げる、15年の5月には大日本国民中学会は、組織を変更し財団法人公民教育会となり、河野正義が理事長になった。公民教育会は、『公民常識』を発行。組織は、機関雑誌部、講演・講習会を開催する講演部、学生の相談指導を行う指導部、全国の青年に図書等を取り次ぐ代理部、通信教育部の5つの部から構成されていた。大日本国民中学会による講義録発行は通信教育部の事業となった。

同年6月、一週間にわたって公民教育会主催による全国青年訓練所主事並指導員講習会を開催、8月には専検受験の会員のための夏期講習会を実施、10月には新潟県において講演会を開催している。

大正15年、時の文部大臣岡田良平は「該講義録の如きは国民教養の一資料として最も適当なるものなりと認め」ている。また鉄道大臣満鉄総裁仙石貢は「近頃鉄道従業員の業績を調査して普通学知識の多少は其能率の増進に苦心し居る際（略）余は我従業員が此平易にして懇切なる講義を師として能率の増進に努むる傍、他日昇進の途を拓かれんことを切望す」と述べた。さらに陸軍大臣宇垣一成は「此の講義録は下士又は其の志望者の学力補充として極めて適当のものたるべく是亦敢えて推賞するを憚らず候」と批評している。

昭和の時代にはいり、2年1月には本会創立二五周年記念大講演会を開催、永井柳太郎が講師となっている。河野正義は、3年4月に藍綬褒章を拝受した。その記念事業として「一、御恩賞記念貸費生百名を採用し上級学校に学ばしむ。二、各種試験合格者に奨学資金を贈呈。三、特待生制度を新設し成績優良なる会員の会費を免除す。四、全国の孝子模範青年等を表彰」している。

5年2月には会員会友大会を大日本国民中学会講堂で開催。3月には本会講義録審査委員を決定した。審査委員には文部省より3名、東京高等師範学校教授3名、東京府立中学校・私立中学校教諭10名のほか総勢22名があたり、6月には「改正中学校令に準拠し講義録全部を改版に決定し着々準備」し第1号を発刊。7年4月には駿台商業学校を開校している。

昭和8年1月には、山梨県会員会友懇談会、徳島県会員研究独学講習会、神奈川県誌友会、三重県会員会友研学懇親会、京都府会員会友懇親会、愛知県会員会友懇親会を各々開催。この年の2月以降だけでこの種の会は全国各地で29回開催されている。その一方で8月には中等学校中途編入者のための夏期講習会を開催している。

8年以降における会員会友の懇親会・懇談会等は9年には19回、10年には18回、11年には23回、12年には15回、13年には21回、14年には11回、そして15年9月までに9回開催されている。しかし、この会員会友会がどのような活動をしていたのかは分かっていない。同年1月大日本国民中学会は、植民地「満州国新京」に支局を開催した。

大日本国民中学会の会員数は、大正14年5月1日号の『中学世界』の広告によれば「大日本国民中学会の現在会員は日本全国の中学生生徒総数よりも多き事更に七萬九千七百余人也」とあり、昭和15年には「卒業生百九十五萬四千人、現在会員十萬六千三百七十人、支局支部一千五百二十九人」という驚くべき数の会員を集めていた。この数字そのものを鵜呑みにすることは危険であるが、いかに大きな中等教育の教養を求める青年たちのための通信教授機関であったかは想像されよう。

『少年倶楽部』昭和18年3月1日の広告には「創立四〇周年新学期開講最新講義録の完成講義

全部改訂す」、[当局の意向尊重全部新組視力の保全に留意細字全廃]として名称は「国民中学講義録」となり発行している。15ヶ月全科卒業、月1回発行、会費1ヶ月1円80銭としていた。第二次世界大戦後この講義録がどのような運命をたどったのか、その経緯については不明である。

4. 専検と独学

ところでこれらの中学講義録を購読し、学習した独学青年の自己学習の意欲を喚起し学習の公的保障を与えたものは専門学校入学者検定制度いわゆる「専検」であった。このことは今まで掲載した受験記のなかからも十分明らかになってきたところである。もちろん、後述するように、専検受験を中学講義録購読の初発の動機として学習した人たちはばかりではないことはいうにおよばないが、専検がかれら独学者の自己学習の意欲を喚起し、公的に保障する制度として機能したことは歴史的事実である。

では、専検とはどのような制度であったのだろうか。

専検は、明治36年専門学校を中学校との関連において明確にし、高等教育制度の中に位置づけることを目的として「専門学校令」が公布されたことによって発足する。この勅令によって専門学校の入学資格は、その第五条に「中学校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女学校ヲ卒業シタル者又ハ之と同等ノ学力ヲ有スルモノト検定セラレタル者以上ノ程度」と定められた。同年3月31日省令第14号において「専門学校入学者検定制程」が制定されたことによって、4月から開始される。この「規程」の内容は、第一に検定の種類を2つのタイプに分けて、試験検定と無試験検定とした。第二に、試験検定の受験資格を、中学校、高等女学校に在籍あるいは卒業していないものとし、「官立、公立ノ中学校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女学校ニ於テ便宜」実施するというものであった。従って「之を行なふと否とは全く学校の自由であって必ず毎年之を行なふものとは限らない」状況にあり、厳しく、しかも不確実な試験であった。第三には「試験検定ノ学科目及其程度ハ中学校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女学校ノ学科目及其卒業ノ程度」の学力を検定するものであった。すなわち男子は修身、国語、漢文にはじまり数学、外国語、図画、体操までの12科目、女子は修身、国語、歴史、地理、理科、数学、家事、裁縫、体操の9科目に一度の試験において合格しなければならなかった。そして合格したものには「試験検定合格証書」が交付された。

この制度は中等学校に類する各種学校の卒業生や純粋な独学者を主な対象者として、かれらに正規の中学校卒業生と同等の学力を付与することを目的としたものと思われる。

しかし、専検は、中学講義録の出版社の創設時期と比較しても、この制度そのものの発展が中学講義録の普及・発展と強く結びついていたことは十分に推測される。

発足時の専検制度は、「放任主義」的性格が強く、「禁止試験」であり、必ずしも独学・苦学青年に中等学校卒業資格＝専門学校受験資格付与する学歴取得装置として開かれていたものではなかった。

たとえば、大宅壮一は、大阪の茨木中学校を自主退学した後、「徳島中学で検定試験をうけ、百人近い中からたった一人、偶然にも合格した。退学されたお蔭で、いっしょに入学した仲間がまだ四年生でいるうちに、私だけ卒業の資格を得たことになったのである」⁴⁰⁾と述べているよ

うに、専検制度は、極めて難しい、狭き門であったといえることができる。

このような「禁止試験」としての専検制度に対して、当時、現場の先生からも批判が起こっていた。

福岡中学校、教諭大島六太郎は明治43年の中等教育大会において「私が初めて教鞭を取りましたのは明治41、2年の頃より此専門学校入学者検定試験なるものが始まりました。其当時全国に於ける其合格者は非常に傑少でありまして近県に於いても殆ど皆無でありました。此試験は貧者子弟救済の効果はないものであります」と述べ、「成績の良好なる学科に対しては合格点を与へ三年間位之を有効機関となすこと」⁴¹⁾という科目保留合格制度を提案している。

このように専検は、「落とすための試験」としての性格を強く持ち、教育実家の批判に代表されるように社会問題化していたと推測される。

政府は大正13年10月11日省令22号「改正専門学校入学者検定規程」を作成し、その弊害を除こうとした。10月21日発行の『文部時報』152号で文部次官松浦鎮太郎は「専門学校入学者検定規程改正ニ就テ」において改正の主旨を次のように述べている⁴²⁾。

「中学校ノ卒業ハ普通文官任用資格、高等試験受験資格、各種教員検定試験受験資格、専門学校ノ入学資格等ノ基本ヲナシ高等女学校ノ卒業、教員検定受験資格、専門学校入学資格等ノ基本ヲナスモノテアツテ中学校又ハ高等女学校等ヲ卒業シナイ者カ之ニ対応シテ其ノ進路ヲ開クニハ一ニ専門学校入学者検定規程ニ依ル試験検定ニ合格スルコトヲ必要トスルノテアル然ルニ従来此試験ハ官立、公立ノ中学校及高等女学校ニ施行方ヲ委任シテアツタ為試験ノ時期、方法、程度等モ自ラ区々テアツタハカリテナク全ク之ヲ施行シナイ地方モクナカツタノテアル又は従前ノ規程テハ中学校又ハ修業無限四年程度ノ高等女学校ニ於テ課スヘキ全学科ヲ一時ニ受験スルコトヲ必要トシ且合格科目ノ留保ヲ認メナカツタ為、受験者ニ大シテ動モスレハ難キヲ強フルノ実状テアツタ」

続けて、松浦は、この改正により「試験ハ極メテ公平」と述べ、「境遇上正規ノ学校ニ学フ能ハサルカ如キ不幸ナル青年子弟ニ対スル一福音」であると同時に「従来徒ラニ埋没シツツアツタ人材ノ進路ヲ開拓シタルモノテアツテ社会政策上多大ノ効果アルヲ信スルノテアル」としめくくった。

文部次官松浦は専検制度の導入は「境遇上」正規の学校に進学・就学して学問することのできない「不幸ナル青年」から優秀な人材を確保し、その進路を開拓することを目的とするものであったが、「此制度を設けて精神を没却するに等しいものに」なったことへの反省でもあった。それは社会政策上すなわち高等小学校への進学者の増加とあいまって高等教育進学機会の拡大上「効果」のある制度としている。

では改正された「専検」制度の内容とは何か。

第一は国家試験として、毎年一回は実施。しかも、官報で告示するということであった。それ以前は各実施地が地元の新聞か県の広報に広報するに止まっていた。第二に「試験検定ノ学科目中一科目又は数科目ニ就キ中学校若ハ修業年限四箇年以上ノ高等女学校卒業者ト同等以上ノ学力ヲ有スル者ニ対シテ当該学科目ノ試験ヲ免除」するというものであり、「科目保留制度」の導入がはかられ、合格した科目は「永ク其効力ヲ留保シ」さらに「残余ノ学科目ヲ受験」し合格すれば合格証書を交付されることになったのである。

表9 大阪府における「専検」試験の志願者・合格者数一覧

年 度	志 願 者	合 格 者
明治36年	4	1
37	17	1
39	12	0
43	13	0
合 計	46	2

大阪府立北野高等学校校史編纂委員会『昭和44年3月校史史料集
第二分冊 学校日誌（明治6年～44年）』より。

この制度は基本的には昭和25年「大検」に統合されるまで大きな変化はなかった。では、改正以前と以後では、専検受験者の動向にどのような変化と特徴があったのだろうか。まず改正以前について検討してみると、資料は極めて乏しく断片的な記述にたよるしかないが、その特徴は概観できる。

例えば、大阪府立北野中学校で行われた「専検」受験者と合格者を見ておこう。表9はその結果をまとめたものである⁴³⁾。

この表からわかるように、わずか4年間であるが、志願者46名に対して合格者2名である。では実際どのように、専検はどのように行われていたのだろうか。

明治36年から39年と43年の試験の風景を再現してみよう。

明治36年

6月4日大阪府令第44号ニ依り専門学校入学者試験検定ヲ当校ニ於テ施行スルコトニ付志願者願書ノ受付来ル8日迄、其試験ハ10日ヨリ17日迄トシテ新聞誌上ニ広告ス
8日専門学校入学者検定志願者トシテ来校セシ者9名内出願者書類ノ完全ニシテ受取セシ者4名、其他郵便ヲ以テ規則書送付ス及問合せ来ル者13名ナリ
10日本日ヨリ志願者4名ヲシテ試験施行ス
15日正午専門学校入学者試験検定志願者ノ及落査定ノタメ教員会ヲ開ク
18日専門学校入学者検定試験ハ17日を以テ終了ス合格シタル者ハ山口県士族俵田門1名ナリ、外三名ハ試験半途ニシテ欠席

表10 東京都「専検」試験合格者一覧
—明治36年～大正15年—

年 度	合 格 者
明治 36年	8
37	3
38	5
39	6
40	7
41	12
42	14
43	12
44	18
45	17
大正 2	17
3	13
4	18
5	20

受験世界編集部『専門学校入学者受験指針』大正5年、13p

明治37年

5月5日専門学校入学試験検査試験願者ノ願書17名分受理ス

18日専門学校入学者志願者検定試験ヲ了ス

23日専門学校入学志願者検定試験ニ合格シタル者、山口県士族冲原太郎ニ合格証書ヲ授与ス

明治39年

5月10日専門学校入学者願書受付タル者14名

16日専門学校入学者試験検定志願者試験ヲ施行（12名）

21日専門学校入学志願者前期試験終了合格者ナシ

表11 福岡県、佐賀県における「専検」受験者
・合格者数一覧—大正2年～大正9年—

年 度		大正2年	3	4	5	6	7	8	9
福 岡 県	受 験 者			9	13	15	11	13	32
	合 格 者			1	0	1	3	1	1
佐 賀 県	受 験 者	4	2	4	5	6	9	9	8
	合 格 者	1	0	0	1	1	1	0	2

『福岡県教育』284号、6頁より

明治43年

5月4日専門学校入学者検定試験講堂ニテ施行受験者13名（11日迄）

13日専門学校入学者検定試験成績発表合格者ナシ

ここから分かることは、第一に試験施行日は新聞に掲載して広報していたこと、第二には試験の途中でそれまで行った試験に及第していないと途中で不合格になり、振り落としにされていた、第三に合格者がゼロの年がありかなり厳しい合格しにくい、難関の検定制度であることがわかる。

東京の場合はどうであったのか。

『中学検定指針』は次のように伝えている⁴⁴⁾。

「専検の志願者は百四五十名乃至百七八十名に上るが其の合格者の割合は大抵一割内外である。即ち受験者が百五十名ありとすれば約十四五名は合格している」

表10は、明治36から1916年までの合格者一覧である。先の記述から仮に受験者を150人平均としてその比率を出したのがカッコの中である。

この結果から、明治41年度を契機として合格者は増加するが全体的に合格者は少なく、大正期に入っても合格率10%内外であることがわかる。

福岡・佐賀両県の場合はどうか。

その結果を示したのが、表11である。

この結果から、先の大阪・東京の場合と同様に10%内外の合格率であることが分かる。

受験者の学歴について、雑誌『成功』の記者は「中学3・4年まで遣ったものが多く、全くの独学者ではなかったやう」⁴⁵⁾だと指摘している。しかし、先の福岡中学校の大島は「彼等の学

歴は小学校卒業後国民中学に入学せるもの多く其の他青年団若は実業学校の夜学校に通って居るのである。中学2、3年の退学者の如きは少ない」と述べている。

これらの記述からも分かるように、小学校を卒業して中学講義録などの学習媒体あるいは夜学などの学習機関で勉強しなければ合格困難な検定試験であることが分かる。

たとえば、大正11年に合格した熊本の高木利三郎は、合格までの軌跡を「受験記」という形で残している⁴⁶⁾。

それによれば、高木の「少年時代は所謂赤貧洗ふが如しという家計」で「尋常小学を卒へてから辛うじて高等小学の二年まで通った」が退学した。のち、活版屋の小僧、その間、大日本国民中学に入会したが会費1円払えず退会。16才の時、村役場の書記。18才で大日本国民中学に再入会。「士官になろうと目的を抱く。勉強がはかどらないのでそれまでの貯蓄を携え大正10年5月九州から上京苦学。6月はじめから正規英語学校午前部普通科と研数学館午後部普通科に通学。勉強は「朝5時に起きて飯を炊きながら中学講義録を読み、飯喰って7時半から登校し午後3時すぎかえって習ったことの復習亦講義録をやり、夜10時までと決めていた」という努力家、勤勉な勉強態度であった。

しかし、翌年大正11年2月福岡中学での応試には失敗。彼は、6月にやっとの思いで、熊本で合格の栄冠を手にして居る。

この事例は、中学講義録で勉強しつつも、上京して予備校に入り知識が蓄えてでなければ合格できなかったことを教えている。

では、合格するにはどのくらいの点数を取らなければならなかったのだろうか。

ここに貴重な資料がある。それは富山県立富山中学校所蔵の『明治四十三年以後専門学校入学者検定試験受験者名簿』である。この資料を手がかりに検討してみよう⁴⁷⁾。

Fの場合

明治15年6月10日生/明治30年富山県立第一中学校入学/34年第五学年在学中退学/43年三月検定受験(点数修身60・国語45・漢文60・英語70・歴史60・地理地文67・代数50・幾何65・三角55・物理70・法制経済60)総点数626点平均点60/明治43年合格証書授与。

徳島県における「専門学校入学者試験検定心得」によれば「第三条各科目五十点以上六十点以上ヲ得タルモノヲ合格トス」となっているが、富山県の場合は、平均で60点以上であれば合格証書を交付していたことが判明し、合格の裁量は各道府県に任されていたと推測できる。

では改正後はどのような特徴と変化をみせるのだろうか。

表12は大正3年から昭和25年までの出願者・合格証書交付者・科目保留者を一覧化したものである。

全般的な傾向をみると、まず驚かされるのは出願者の著しい増加現象である。大正3年改正後第一回の試験検定が行われた。出願者男女合わせて2,106人であった。それが翌年になると6,213人と3倍強の増加となり、さらに昭和3年になると10,982人と一満越し、昭和4年には13,899人と1920年代から30年代にかけてのピークを迎えた。その後も一満人代前後を維持し、昭和16年には、それまで回数平均2回であったのが3回となり、出願者25,633人と戦前のピークを迎える。

この数字だけを見ると、改正後の出願者は1920年代半ばから1940年代前半にかけて非学歴者

第2章 中学講義録の世界

表12 「専検」試験出願者・合格者一覧—大正13～昭和25年—

年 度	回数	出 願 者			合格証書交付者			合格率 %	科目合格保留者		
		男	女	計	男	女	計		男	女	計
大正13年	1	1,846	260	2,106	132	27	159	7.5	1,419	211	1,630
14	2	5,637	579	6,213	231	61	292	4.7	3,397	382	3,779
15	2	8,381	1,026	9,407	460	133	593	6.3	5,363	680	6,043
昭和 2	2	8,049	1,237	9,286	460	132	592	6.4	4,581	760	5,341
3	2	9,651	1,331	10,982	546	96	642	5.8	5,585	868	6,453
4	2	12,299	1,600	13,899	640	173	813	5.8	7,299	957	8,256
5	2	12,252	1,511	13,763	732	163	895	6.5	7,006	915	7,921
6	2	11,986	1,584	13,570	458	179	637	4.7	5,457	864	6,321
7	2	9,590	1,263	10,853	401	153	554	5.1	4,969	729	5,698
8	2	9,104	1,256	10,360	315	133	448	4.3	4,405	729	5,134
9	2	8,515	1,291	9,806	308	120	428	4.4	3,926	727	4,653
10	2	7,940	1,391	9,331	262	105	367	3.9	3,505	821	4,326
11	2	7,310	1,382	8,693	243	145	388	4.5	3,882	807	4,689
12	2	7,437	1,503	8,940	222	115	337	3.8	3,240	757	3,997
13	2	7,309	1,483	8,792	210	115	325	3.7	2,897	663	3,560
14	2	9,362	1,807	11,169	226	102	328	2.9	4,121	897	5,013
15	2	12,164	2,199	14,363	265	158	423	2.9	4,414	914	5,328
16	3	23,561	2,372	25,633	458	152	510	2.0	8,008	1,169	9,177
17	2	16,461	2,742	19,203	168	114	282	1.5	5,386	1,169	6,555
18	2	21,611	2,987	24,598	323	144	467	1.9	7,190	1,063	8,253
19	1	531	193	274	123	86	209	28.9	154	47	201
20	1	1,577	174	1,751	19	7	26	14.9	702	64	766
21	1	4,606	479	5,085	141	23	164	3.2	254	207	461
22	1	3,871	293	4,164	197	15	212	5.1	1,318	110	1,428
23	1	2,664	179	2,843	154	26	180	6.3	987	64	1,051
24	1	1,103	71	1,174	155	15	170	14.5	528	39	567
25	1	740	89	829	340	48	388	43.5	714	202	916

「文部省年報」各年度より作成。ただし、聞き取り調査によれば昭和19年度は試験を実施していない可能性が高いが、「文部省年報」の記述をそのまま転載した。

の教育資格装置として隆盛を極めた時期となっている。しかし、それに比して合格率は昭和5年をピークとして減少している。

このことは、学校に入ることがかなわなかった独学青年たちの学歴取得装置となったことを意味している。それゆえ出願者の高さに比して合格率の低下を招いたものと考えられる。それを物語るように科目保留者の数はこう常的に増加していた。それは一科目ずつ、何年かかけて合格していったものと考えられる。例えば「昭和3年度第一回男子専門学校入学者試験検定科目合格者調」があるが、それによればもっとも合格者の多い東京の場合、1,364人の受験者のうち一科目合格者は670人と約49.12%であった。さらに全体をみると、合格者数3,036人のうち1,579人と約52.01%が一科目合格者であった⁴⁸⁾。

そのことは天野郁夫氏が指摘するように、「独学による資格の取得ルートが、多数の独学者を集めた時代は、同時に、学歴主義的な秩序が確立されそれに準じる教育資格の取得―「専検」合格なしには、どれほど実力・学力があろうと、社会的にそれが認められ、報いられることのきわめて少なくなった時代でもあった⁴⁹⁾ことをしめしていよう。すなわち非学歴者の学歴取得史という観点から見たとき、中学校卒業の学力が公的に認められなければ、つまり「学問おおくせしていふ証書 われ持たざれば頭あがらず 学問を持たで学歴持つ人と 肩ならぶるを許されぬ世界ぞ⁵⁰⁾が到来し、拡大していったことを物語っている。そのことを裏づけるかのよう、当時の児童雑誌には多くの中学講義録が掲載される、その一方で、昭和にはいると「中学世界」誌上には「中学を経ず中学卒業資格を得る法」とか「独学者への大福音立志三経路」などが掲載される。また「小学校卒業立身成功案内」(昭和9年)、「専検・高検・高資・実検受験案内」(昭和14年)などが刊行される⁵¹⁾。

このように1920年代から30年代は中等教育の再編成過程の論議が進む中、これまで中学校卒業とは無縁な青年層が学歴取得の要求をするようになるのである。すなわち学歴主義の凡化が非学歴者の日常世界にまで浸透し、国民の支持をえた学歴社会の成立を見ることになるのである。

5. 専検合格体験記からみた中学講義録の特質

筆者は、これまで中学講義録の発行母体の活動に重点をおいて中学講義録の特質を検討してきた。また、断片的ではあるがいくつかの中学講義録購読者たちの声にも注目してきた。先に検討したように、中学講義録は、例えば大日本国民中学会の活動を辿ることを通して、「中堅国民」としての教養を与える学習機会の媒体としての中学講義録から学歴に準ずる資格獲得のための装置としての中学講義録へと、その機能を変化したことを明らかにした。たしかに、中学講義録を発行する側の論理は「公民教育」という政策的対応や学歴社会に取り込まれていくものであったと指摘することができるかもしれない。しかし、学ぶ者の側、すなわち中学講義録を利用した読者たちの側から見るとどうだったのだろうか。

購読者の視点から中学講義録の特質を検討した場合、彼等は単に学歴のみを求めて学習したのだろうか、もっと何か別の動機によって中学講義録を購読していたのではないだろうか。

このような問題意識のもとに、ここでは、彼等の独学を志す姿勢や講義録をとった学習の動機や学習の様式について検討してみたい。

第2章 中学講義録の世界

具体的には、大日本国民中学会の機関誌『新国民』と大正9年に発刊される『受験界』⁵²⁾に掲載された専検合格体験記を手がかりとして検討する。

『新国民』に「受験記」が掲載されるようになるのは1920年代以降と思われる。

ここでいう「受験記」とは、専門学校入学者検定試験に合格した人々の手記すなわち合格体験記だが、次のような特徴をもつ「受験記」も見出すことができる。すなわち(1)始めから専検を目指していたのではなく(2)むしろ中学講義録での独学を志した時点では、専検という制度を知らなかったものである。

さらに、これらの受験記を読み進んでいくと、仮説的にはあるが、学習動機を大きく三つに分けることができるように思われる。第一は上級学校進学できなかったことへの不満と「立身出世」への夢、第二には、自己の労働とそれへの社会的評価への不満、そして第三には、純粋な向上心・向学心の芽生えである。もちろん実際には、このように一人一人の学習動機を鮮明に分類できるものではなく、一人一人、それぞれの中に多様な動機が錯綜している。

これらの方法的限界を考慮に入れつつ、実際の彼等の声を聞きながら考察してみよう。

事例1 Mの場合(大正10年1月専検及第者)⁵³⁾

彼は、東京は京橋の生まれ、尋常小学校卒業後、府立中学を受験し合格したが、「苦しい家計」のため入学を断念し、「己むなく高等小学に入り家事の手伝い」をした。

高等小学校卒業後、夜学で学んでいるなか「一定の資格を有たなければ社会で充分の活動が出来ぬことを熟々感じ」て専検受験を決めた。

かれの受験勉強は、まず高等小学校での英語の勉強や交学での算術の基礎知識を基にして、講義録で勉強し、大正8年5月には研数学館で数学を学び、同年9月には国民英学会で中学3、4年程度の英語を学んでいる。

大正9年2月府立3中で受験したが「代数幾何難問」で第一日で不合格となった。越えて、大正10年1月再び受験しているが、この人の場合専検と高検を両方同時に志願している。この当時、専検と高検の日程は同じ試験場で交互に行われるのでそれも可能であったが、欲張った受験の仕方である。しかし、彼は両方に合格している。

事例2 T(熊本県出身)場合を例にとってみてみよう⁵⁴⁾

Tは明治四〇年ころ専検を受験している。

彼はいう。

私の少年時代は所謂赤貧洗ふが如しという家計で、尋常小学を卒へてから辛うじて高等小学の二年まで通ったが二年を修業すると一三歳の三月遂に退学して、私の村より程近い久留米の活版屋の小僧とならねばならなかった。ここに通っているうちに何の目的もなく学問したさに、大日本国民中学会に入会したが、僅か日給50銭足らずで自分の食費にも不十分なのに、当時一円の会費をどうして親にせびられよう、到々退会の止むなきに至ったのである。

次いで、大正三年の春一六歳の時、村役場の書記となってからは、新聞を読んで広く世間のことを知り、官報等では人の立身出世する様子を見て之をエンウイしていたが如何せん、自分の境遇では致し方もない、さりながら彼も人なり我も人なり、境遇は異なっても要は其の人の精神にありだと感じ、再び独学を志した。(略)大正五年の一月再び同会に入

会した。

Tは勤めの傍ら中学講義録で学習していたが「読まぬ講義録がたまるばかり、幾何学ときたら判ったような判らないもので、初学者で独学者で、凡俗の私にはどうすればよいが判らなかった」と述べている。高等小学校卒業者の学力がどの程度のものであったのかは分からないが、独学で講義録を勉強するのは困難を極めたことは推測できる。Tは、大正10年5月九州から上京苦学し、正則英語学校午前部普通科と研数学館午後部普通科に通っている。

すなわち、専検合格をするためには講義録だけでは十分ではなかったことを、この事例は教えている。

事例3として時代は飛ぶが、大正15年専検に合格した、島根県出身のYの場合を検討してみよう⁵⁹⁾。

Yは、父の病気によって中等学校進学を断念した。彼はいう。「悲哀を感じつつも村の高等小学校へ通いました」、高等小学校卒業後「郵便局の一事務員として希望に燃ゆる身を黒い服に包んで懸命に働かなければならなかった」、「その頃郵便物の中に国民中学会の講義録のあるのを見て知識慾に飢えていました私はすぐに入会しました」と述べている。

ここにも最初から専検を立身出世の手段として、それを目指していたのではないことが分かる。

事例4 Sの場合⁵⁹⁾。

彼は、高等小学校卒業後に単身上京して某会社に勤務する傍ら夜学校に入学・卒業した。当初は、「時恰も欧州戦乱の好景熟期として最初はかなり嬉しかった」が、「私の心には又段々と不満の雲が生じ初めました。そして世の中が次第に暗黒の様になって来ました。鬼の首と思ったのが、いや鬼の足にもならないではありませんか」と、夜学校を卒業しただけでは、充分とは思わなかったらしい。

「私も何とかして人後に落ちざる様にと一奮発せんとすれば何ぞ計らんや、何処の学校でも、直ぐに中学校卒業程度とか何とか言うではありませんか(略)その時初めて専検なるものが、我々独学者の為一途の公道として、開放せられて居る事を知りました。それは大正12年の初めのことでした」と。かれは、専検受験を志向し、中学校卒業資格を取得することを決意する。

早速、古本屋から国民中学会の講義録を買い求め勉強したが、関東大震災に逢い焼失してしまった。大正13年国民中学会の予備校のB級に入学した。この予備校は「A級B級の二ヶ年終了にて、A級は中学校の一、二、三級分を、B級は四、五級分を各一ヶ年宛教授するので、勿論時間の少ない夜間のことですから、修身、回画、体操等はやりません」という。専検あるいは高検受験者のための予備学校であった。彼は休暇を利用し徹底的に勉強し、見事合格した。

事例5は、兵庫県出身のMの場合は、「私は大正四年高等小学を卒業すると百姓をしました。勿論中学に行ける程の財産も無ければ父にも理解もなかった」、「同級生三名の中学校行きは当時の私には子供心には羨ましかった」、「負けてたまるものか、学校に行かずとも勉強して見せるぞ(略)ABCやら漢文とか珍しい本をのぞいていた」、「早稲田・正則・国民と見本を並べて後者を選んで会員となった。三段式の教授は独学者に此上無く学習しやすかった」記している。

Mは「一ヶ年百姓の合間に講義録を持ち(略)次々に来る日まで読破して待っていた。私はどうしても百姓として終始する気にはなれなかった」といい「手近な所からと通講普通科の試験を受けた」そして「幸いに一回で大通局の講習所に入学することができ」ポストマンとなった。Mは「然し働く仕事が出来たからと云って其日其日を満足しては駄目」であり「仕事の合間を見て人の雑談する時間をお昼の与えられた僅かの時間の勉強は減多に欠かした事なしに続けてきた。それが一つの習慣となればなんともない(略)目標を立て、それにむかって進まねば駄目だ」ということを学んだ。Mは自称「万年青年」と云い「これからも本を読めば試験を受けていく」という。Mの試験の経歴は昭和2年尋常小学校准教員検定受験、翌年合格。昭和3年尋常小学校正教員検定受験、音楽のみ落第。同年専検受験翌年まで七科目合格。昭和7年専検合格、「文検」教科受験の準備中でもあった。Mは、検定試験受験は自己修養・自己拡充のためにあったと思われるといっている⁵⁷⁾。

事例四は、中学講義録で勉強する人々は、小学校卒業直後のものが多いが、専検受験となると晩学の人々も多い。彼らの学習動機や体験も考慮して分析することは大切なことであると思われる。

ここでは、福岡出身のNについて検討しよう。彼は二六歳の専検合格者である。昭和九年度に合格した⁵⁸⁾。

一貧農の四男坊として生れ、(略)大正一三年高等小学校を無事卒業した。(略)村役場の給仕として平凡児も幼稚乍ら実社会の一員となった。(略)或る日先生から国中のシオリを戴き独学苦学の方法等に就いて話しされたことを思い出して、大正14年6月本会に入会した。(略)号を重ねるに従って非解な所も多くなりだんだん勉強にあきて来る。(略)自己に対する認識は浅くはっきりとした目的もなかった私は現在の境遇に甘んじて(略)勉強は半年も続かなかった。

工業界に自己の将来を見出すべく、昭和四年三月遂に意を決し五ヶ年の役場生活を捨てて程遠からぬ久留米市の日本足袋工場の一職工として働き出した。(略)好きな化学工業や機会の研究にはどうしても学理の基礎が必要であることを知った。(略)又たとへ身の栄達を望まずとも現在社会の一員として生きていく為には中等程度の学識は必要であると思い、此の時始めて勉強の必要をはっきりと覚ることが出来た。(略)独学の真の意義、目的は資格を得ること以上に尊いものがある。即ち信念の力である。」

事例6としては新潟県出身のS昭和三年会員について検討してみよう⁵⁹⁾。

彼は言う。

私が小学校を卒業してどんな動機で講義録を読むようになったかと云うと、世の多くの独学生は恰も自分は貧困の為中学校へはいけない残念である何とかして彼等に落伍を取らない同等の歩調を持って進んでいきたい、屹度負けるものか、かつて見せる、金と時間の節約だ等々と云って所謂反抗的に発奮して通信教授にたづさわった様に云っている。然し私の実際の動機はそれと大体異なっています。(略)私等の欲望、不満と云った様なるものは、長年間の書物を捨てて何となく物足りない事、学校生活の延長を期したい事に有ったのです。(略)私は少年倶楽部の裏表紙で本会に入りました。(略)もちろん専検などの存在を知っていよう筈もなかった。

事例7 Sの場合は次のようにいう⁶⁰⁾。

昭和四年三月北海道の或る漁村の尋常科を卒業した。(中略)A市の商業学校の入学試験に応じ、首尾よくパスした。(中略)其の年父の経営の漁場は大失敗し、私の家は貧困のどん底へ叩き落されてしまった。僅か四ヶ月足らずの淡い学窓生活で有った。渡樺して高等科を次席で卒業しましたが貧しき暮しの私の家は、今更上級学校の入学も出来ず、隣村の一店員として前垂姿の店員生活が始まりました。然し向学の念止まず、何とかして彼等にひけを取りたくないものと月夜煩悶を続けました。(中略)昭和八年三月親友T君より講義録により立派に中等教育の得られる事を聞き早速入会をしました。(中略)愛誌新国民の受験欄にて専検、教検の存在を知り八月の聖戦無謀にも最初より尋正の堅陣に迫るべく六月末やっと締切に願書を提出しました。

事例8 Tの場合⁶¹⁾。

大正十四年春未だ浅き三月懐しくも八年間の桃源の眠を貧って居た彼は、(中略)実社会へと投出された。(中略)揺籃の眠から目醒めて見れば同窓の友の或る者は東京へ、又は中学校へと皆何れも昔の姿でいなかった。彼自身も請ひ願った中学校へは無理の上からも六十歳余の老父母の差止めにより、残念乍ら全く断念しなければならなかった。僅かの月給の為に裁判所の給仕となり自由を束縛されて居た。

併し彼は何時も「何時か見よ屹度々々彼等を驚鞭せしめてやる」と心の奥底に秘めて居たのであった。(中略)或る日の新聞の一頁に載せられた自宅にて中学卒業出来る国民中学講義録と云ふ広告は彼の心に固く閉ざされた暗黒面に一線の光明を射った。間もなく講義録の第一巻は到着した。そして彼の口からは訳の解らぬABCが幾回となく繰り返された。日本外史の漢文も之も或る一種の快感さを覚えて読破されて行った。実にこれが彼が一転させて専検を受けさせる動機であり、起源であった。

事例9 Yの場合⁶²⁾。

僕は昨秋(昭和七年)の専検に応試して悲惨にも枕を並べての全敗の運命に遭遇(中略)尚もあき足らずに今春の専検へも出陣した結果、僕は再度の失敗に二重奏の憂鬱な現実に前途へ暗雲が漂って来るのをどうすることも出来ない。(中略)ああ?僕の半生を秘めた二十ヶ年の過去は余りにも苦難の連鎖だった。尋常小学を半途退学して良くもない頭脳を鞭撻して来た僕には裸一貫と体操一科目の証明書があるのみだ。

全員諸君には現在の目的は何か?そう問はれたら、直に中等教育の修得と答へられるだらう。然し僕の会員時代には就職への過渡期に於ける勉強だと思っていた。それがそもそも第一の失敗原因だった。国中は就職目的の養機関ではない。中等教育を援けるのが第一の目的だ。僕は機関誌新国民を文芸誌として眺めて来た。それが第二の失敗の原因だ。

事例10 Kの場合⁶³⁾。

私は、高等小学校を卒業した年の十一月、福岡の親類に参りそこで眼を九大病院で治療しつつ、翌年(昭和六年)十月まで約一年間滞在しました。昭和六年五月、国民中学会正則科に入学しましたが、機関誌新国民によって、漸く専検の存在を知りました。(中略)昭和六年十一月に福岡をたって愈々真の活動をすべく、此の広島へ来たのであります。只今居る家も、矢張り遠い親類の家で、それより足かけ三年の今日まで半ば書生の仕事をしつつ

第2章 中学講義録の世界

勉強をして幸福に過してきました。

扱、着いた初めもまだ目的も定まらず、相変らずの怠け方でしたが、家の先生（〇〇師範の漢文教授です）講義録（国民中学会）を根拠にして日課表を示し、勉強するやうにされたので、やっと勉強しはじめた。専検受験を決意したのが昭和七年五月（中略）国中の講義録が二十七号までしか来ていなかったの、漢文は先生のお手のもので、直接にお教へを受け（中略）九月一日、最初の受験の日がきました。（中略）十一月中旬文部省より国語、漢文、地理、図画の四科目証明書がきました。昭和七年は暮れ、昭和八年は訪れました。（中略）四月、二回目の受験。今度は殆ど講義録ばかりでやりました。（中略）六月中旬文部省から科目合格証がきました。物理、修身、博物です。（中略）此の〈昭和八年〉四月から青年訓練所に入所しましたが、いろいろな意味に於て有益であったと思ひます。三回目の受験が来ました。今度は英語を除いた残科目を全部受けました。結果は十一月中旬歴止、化学の合格証明書が来ました。愈々後三科目。英、数、体です。（中略）英語の準備のため親友から小野の英文解釈を借りて、講義録と共に勉強しはじめました。（中略）昭和九年、最後の戦をすべき年は訪れました。（中略）十一月一日、夕方、市内の親友からの来信、思ひもよらぬ自分の合格を報じた文を読んだ（中略）十一月八日、待ちに待った合格証書がきました。

次に合格順に各科目の勉強について記してみます。

1. 国語＝此の科は受験の際はまだ講義録を終了していませんでしたから、家の先生から塚本哲三の「徒然草解釈」を借りてきて貰ひ、これを勉強しました。
2. 漢文＝（中略）家の先生の専門であり、（中略）将来文検をもうけやうと思っていましたから熱心にやりました。
本村武一郎著 漢文解釈法
澤田 總 著 全訳論語詳解
磯野貞二郎著 日本外史
3. 地理＝同様講義録未完前でしたが（中略）高等小学校時代充分やっていたから楽にパスしました。
4. 図画（中略）
5. 物理＝此の科は講義録だけです。正真正銘講義録だけをボロボロになるまで反復練習してパスしました。
6. 修身＝殆んど準備せず唯大明堂の修身科講座の論理のところだけを読みました。
7. 博物＝講義録のみで充分国中の講義は簡にして要を得、絶好の参考書です。
8. 化学＝これも講義録のみです。
9. 歴史＝講義録のみ。
10. （中略）講義録のみでやり通しましたが、結構役にたちました。
11. 体操（中略）
12. 英語＝独学の身でこれにも随分苦しみました。（中略）最初国中講義録をやってから、
ニュークラウンリーダー二、三
小野 英文解釈、同 単語

井上 英作文講義

以上の用書で、合格しました。井上英語講義録は昭和八年四月からとりはじめましたが、専検には英作文丈やっただけで他は未習です。」

事例11 Yの場合⁶⁴⁾。

大正十五年（中略）三月高等科を卒業する私は好学心の向ふがままに本会（大日本国民中学会）の門に入ったのでございます。（中略）十五年二月（当時一五歳）入会、昭和三年三月三十一日と（記憶します）母会の卒業証書を頂き、其の後二年許りは徒費したと言ってもよい位でした。昭和五年の秋頃でした。別に志があったわけではなかったが、一つ力試しに専検か高資でもやってみようかと思ひついで、それから積み込んであった講義録を動員して軍備の充実を心をはたかすと言ふ者です。翌六年四月（中略）受験の一步はふみ出されました結果（中略）化学、国語、漢文、地理、歴史、修身、体操の七科目を載せて文部省の証明書が飛込んで参りました。（中略）翌七年四月再び挑戦した所（中略）図画一科目、茫然としてしまひました。（中略）後一年、今年（昭和八年）四月最後の決心をきめ、背水の陣を布いて出場（中略）結果何と言ふ好運か全科合格の証書を得ることになりました。（中略）私は全くの独学でした。主力は講義録で国漢、地、歴、修、図、博、体には全く参考書なし、理化に一冊、数に三冊、井上英語講義中学四年程度迄を用ひただけです。補習学校へはよく通ひましたが、之はよく活用すべきだと思ひます。昭和四年からは青年訓練を受けましたが、体操は此所で教へられた如く活発にやっで大いに有効と思ひました。

事例12 Uの場合。（昭和八年合格）⁶⁵⁾

私は昭和八年四月長野県に於て第一回専検に合格した者であります。（中略）齢既に二十有二歳です。私が専検と云ふものの施行されるのを知つたのは国中の講義を読む様になつてから、其機関雑誌である『新国民』誌上に於ける先輩諸氏の受験記を読んで後の事であります。

「愈ら専検に应试すべく意を決し」たのは「昭和三年の七月頃からであります。そして昭和四年の四月に国漢二科目に合格しました。（中略）かくして第二回目には修、地、体三科目に合格し余すは七科目と一層努力を続け第三回には物理、図画、四回目には博物化学に合格しました。愈此所迄来ると高資七條試験にも手が届きさうになりましたので、六年の秋には高七を受験する事にして残りの数学と歴史をやり十一月に合格証書を来ました。（中略）昭和七年の年は一年英語のみやりました。八年の四月受験して合格したのです。数へて見ますと、昭和の四年から五、六、七、八年の五ヶ年掛りです。

勉強法について

国語—中学講義録通読。徒然草精解。

塚本哲三氏の国文解釈法

中学文法書、現代文解釈

漢文—中学講義、塚本氏の漢文解釈法、十八史略

（中略）

地理—最新中学地理教科書（三省堂）、中学講義

歴史—中学講義録、二回通読後、中等学校教科書を日本東洋西洋とも研究しました。

第2章 中学講義録の世界

数学—講義録で基礎を作り中等教科書を主として一通りやり参考書は「代数の話」と武田氏の「幾何学」藤森氏の「三角」をやりました。

物理—講義録は読んだが実に簡単過ぎたので物理学粋をやり法則及公式を全部暗記。

化学—講義は勿論読みました。中等教科書を主として読み、(中略)分子式を二百位カードに書取って暗記しました。

修身—講義録の他に中等教科書を倫理学の書籍を少しやりました。

博物—動、植、生理、礦物、通論は中学教科書を主として講義を参考書としました。

図画—講義録の他に参考書一冊。

体操—青年訓練所へ行った為別に参考書も使用しませんでした。

英語—之は真に独学者の大敵です。(中略)研究社の単語カード五箱と小野圭次郎氏の参考書と此書の終りの熟語約千を覚えた事が一番力をつけました。

事例13 Hの場合⁶⁶⁾。

彼は20歳にして合格した。彼はいう。尋常小学校「八ヶ年は常に首席で通したのだが、自分より成績の悪かった他の級友達が続々中学校へ入る。休暇ともなれば見よ制服制帽に金釦天下国家は我が物とばかり満面得意然として大道を濶歩する彼等の姿」に「悶々たる心情に日夜」悩まされ「単調な童心には羨望と嫉妬が凡べてを支配した」と。そして「登竜門専検の征服を誓」い、高等小学校に入学と同時に早稲田中学講義録を買い求め勉強を続けるとともに、卒業後、長崎の夜間中学に入学した。彼は新聞配達人をしばらく経験したのち、長崎紡績の給仕となったが、夜間中学3年の時県立中学理化教室の助手となり、その傍ら勉強を続けた。

使用参考書は以下の通りである。

英語…教科書、小野圭次郎「英語の文法」「英語の作文」「英語の単語」

数学…教科書、岩切精二「最新代数学精義」

佐久間謙「幾何学重要問題の正しき解き方」、中学講義録の三角法

国語…芳賀矢一「改定帝国心読本」巻5～9、塚本哲三「新訂国文解釈法」

漢文…服部宇三吉「漢文新読本」巻1～5、塚本哲三「新訂漢文解釈法」

物理…教科書

化学…竹原熊吉「新訂中等化学」上下

地理…教科書

歴史…八代、三上両氏「新体日本歴史」、瀬川秀雄「中等西洋歴史」

諏訪徳太郎「最も要領を得たる西洋歴史」

博物…教科書

修身…教科書

図画…夜間中学で教わったもの

事例14 Iの場合⁶⁷⁾。

彼が「最初に専検の存在を知ったのは国民中学会の機関雑誌「新国民」に依ってであった」、また「先輩の燃ゆるような受験記に刺激されていた」という。彼は17歳の秋に通信講習所に入所、一年間の学生生活ののち「東京××局出向を命」ぜられたが、「忘れていた向学心

が湧きわし」専検受験を志した。

使用参考書は以下の通りである。

国語…塚本哲三「国文解釈法」「現代文解釈法」

漢文…塚本哲三「漢文解釈法」

地理…諏訪徳太郎「最も要領を得たる日本（外国）地理」

歴史…諏訪徳太郎「最も要領を得たる日本（東洋・西洋）歴史」

博物…中等教科書

図画…富岡伊三郎「用器画法新解」

物理…中等教科書

英語…小野圭三郎「英文の解釈」「英語の文法」「英語の作文」「英語の単語」

数学…藤森「代数学学び方考え方と解き方」上下

藤森「幾何学学び方考え方と解き方」上下・「カード三角法」（研究社）

事例15 Iの場合。(昭和10年合格)⁶⁸⁾

尋常科卒業を目の前に控へた昭和二年春の頃（中略）中等学校入学の試験勉強をやっていた自分であった。中学の入学試験は無事通過したが家には入学当時要るだけの金がなかったのでむぎむぎと入学出来ずに終わってしまった。（中略）兎に角涙を吞んで中学入学を思ひ止り母校の高等科へ入り高等科卒業と同時に本会に入会して講義録で独学を始めた。（中略）専検受験を志し本格的に受験準備を開始したのは昭和六年九月翌年春のものをめざしてであった。

受験実況

第一回にかくして、国漢、地、体の四科目を得た。（中略）昭和八年四月には、物、歴二科目に合格し、（中略）九年四月に多年の屈辱を一戦に雪がんと努力したが結果は英数だけ残って不合格となった。（中略）今年九月の合格となったのである。

各科目について

国語…講義録の外に徒然草の簡単な注釈書位見てをけば充分です。徒然草は毎年一回位は必ず出ますから是非必要です。

漢文…之も講義録の外に論語、孟子の簡単なものをやっておけば充分です。

地理…参考書は使はずに講義録ばかりでやりました。

体操…(略)

物理…之も可成苦しみました。講義録に依らず、桑木博士著、物理学教科書を主としてやり、石川正智氏著、加藤氏著の計算法二冊をやりました。

歴史…之は殆ど講義録ばかりでやりました。

修身…講義録の外に中等教科書一から五迄やれば充分です。

図画…(略)

博物…講義録を全部学習すれば充分です。

数学…此の科と英語是最難物で随分苦勞しました。（中略）算術は殊んど勉強しない位にし代数と幾何は何れも石野勝五郎氏のものを用ひ、三角は講義録ばかりでやりました。

英語…之は最初より純独学でやることは殊んど不可能であると思つて居ります。

最後に

私は農業を為すべく生れた者で必ず農学に生くべきだと思ひ勉強は自分の趣味としてやって来ましたので合格も比較的遅れました。其の為に農事に関しては人より以上に働いたと思つて居ります。かくは言ふものの心の奥にはやはり烈々と燃える何物かが蔵されて居ました。専検合格と同時に陸軍現役兵に徴集せられ関東軍独立守備隊に入営を命ぜられ近く渡満することとなりました。当地出発は十二月一日です。

事例16 Hの場合⁶⁹⁾。

彼は、「小学校卒業後直ちに測候所の給仕」として勤務する傍ら、「福岡市の夜間中学」に入学、5年間学んだのち、「併し夜間中学は昼間の中学」と「同様の資格が与えられ」ない、「俺だってその位の実力が有るのだぞ」と言うことを「昼間の中学生に示してやりたい為」専検受験を思い立ったという。受験勉強は「大体学校で習った事で参考書ばかりで致しました。」

具体的に、以下のように参考書を列挙している。

地理…諏訪徳太郎「最も要領を得たる日本（外国）地理」
歴史…諏訪徳太郎「最も要領を得たる日本（東洋、西洋）歴史」
博物…教科書のみ
修身…教科書のみ
漢文…塚本哲三「漢文解釈法」
国語…塚本哲三「漢文解釈法」
数学…佐久間謙「代数」、吉岡斗松「幾何学」、三角は教科書
物理…高田徳佐「物理学粹」
化学…高田徳佐「化学粹」
英語…小野圭次郎「英文の解釈」「英語の作文」
図画…教科書

事例17 Mの場合⁷⁰⁾。

明治44年生まれ。大正14年小学校卒業後、給仕として森林事務所に勤務する傍ら、国民中学講義録で「全科併合進主義」で勉強した。彼は「日科表を作ってどんなに苦しくても必ずやりました。夜です。十二時を超したようなことは毎夜続けました。時には、二時も三時頃までやり疲れきって前後不覚の眠りに落ちたことも一再に止りません」と述べている。ここでも、使用参考書が詳細に列挙されている。

数学…代数を除いたほかはすべて講義録、根津秋山氏「代数」
修身…講義録
国語…講義録
漢文…講義録
博物…中等植物教科書
化学…「学生の化学」（三省堂）
地理…講義録
物理…「学生の物理」（三省堂）

歴史…日本・「学生の日本歴史」(三省堂)
東洋・諏訪氏「最も要領を得たる東洋史」
西洋・「学生の西洋史」(三省堂)
図画…大村氏「用器画法詳解」
英語…小野氏「英文の解釈」「英語の作文」

これらの事例から、一定の共通性をみいだすことができる。

まず、専検受験を決意した動機であるが、おおむね、以下の2つのことが要因となっている。第一に、主として経済的事情から正規の中学校へ進学できなかったことに対するルサンチマンが、基層にある。第二に、中学校卒業の学歴をもたないと、社会で十分な処遇を得られないことに対する不満や焦燥感が、受験を思い立つバネとなっているのである。そして第三には、純粋な向上心・向学心の芽生えである。もちろん実際には、このように一人一人の学習動機を鮮明に分類できるものではなく、一人一人、それぞれの中に多様な動機が錯綜している。このことは、大正中期には、すでに、中学校や中卒の学歴が、誰にとっても手を伸ばせば届く範囲にあるものと思われるほどに身近なものとなり、逆に、そのために、それをもたないことが、様々な社会的場面において、不利に働くと認識されるようになっていくことを示唆している。

次に、専検受験のための学習プロセスが詳細に記述されている点に、共通性をみいだせる。これこそが、読者が最も必要とした情報であろう。正規の中学校教育を受けていないこれらの青少年たちは、基本的には独学で学習するしか方法はないのだが、そうであるがゆえに、どうやって勉強したら合格を掌中にできるかについての情報に餓えていたと思われる。

さらに、この学習プロセスそのものにも、いくつかの共通点がある。その第一は、講義録は随所に使用されているが、全面的にはそれに依拠して受験勉強をしてはいない。第二に、講義録以外に、各種参考書を使っているが、それぞれの科目で定番らしきものがあつた。第三に、それらの参考書は、中学生が使用していたものでもある。第四に、夜間中学、予備校、あるいは、中学校の助手といった形で、学校教育に触れているということである。

すなわち、制度改正後も合格率の低かった専検に合格したきわめて小数の者は、正規ではないが中学校に相当するレベルの「学校」教育を享受し、正規の中学生と同様の参考書を使用して勉強しているのである。独学とはいえ、「学校」という対面の教育の場から全くかけ離れたところで、中学校の教育内容を印刷した活字メディアである講義録だけに依存していたわけでないことがわかる。彼らの合格の秘訣の一つに、何らかの学校教育に接触できたことがあげられるならば、講義録一専検という独学の道は、「学習」だけでは容易に完結するものではなかったことを指摘でき、さらには、そこから「教育」と「学習」の関連構造についての示唆をよみとることができる⁷¹⁾。

注

- 1) 本誌は、山県悌三郎主幹のもと少年園より発刊された。近代少年雑誌の先駆的役割を担ったとして高く評価されている。山県は安政五年近江に生まれた。彼は幼き頃より英語・洋算の手ほどきをうけるほど家庭環境に恵まれていた。明治五年育英義塾で学んだのち東京外国語学校英語学科に入学するが学資滞納につき除名される。そして東京師範学校中学師範科に入学、博物学を専攻し、明治十二年

卒業している。卒業後、理科教諭として埼玉県師範学校の教諭として赴任、のち宮城中学校に奉職するも、まもなく帰京。西村茂樹・伊沢修二の推薦で文部省から博物学教科書の編著を依頼される。後、愛媛県師範学校校長まで勤めるが、再び帰京し、文部省編輯局に勤務し、初等・中等学校の博物学教育を研究課題とした。しかし、明治十九年役人生活に終止符をうち、在野におり、文筆活動を行った。明治二十一年高等小学校・尋常中学校の生徒を対象とする雑誌を刊行する。それが「少年園」である。発刊の主意は「厳正なる学校課業の香味となり、或は温和な家庭教育の薬石となり、又或は社会的教育の指南となり、職業教育の枝折と」なること「すなわち学校教育のみならず家庭教育・社会教育の教導となる」ために刊行したとある。『少年園』の創刊号の発刊部数は一万二千、一年後には一万八千部に達したといわれている。欄構成は、少年園（論説）、学園（科学）、文園（文学）、叢園（時事報道）、芳園（少年投書）等からなっている。これらの掲載記事を概観してみると、まず当時の遊学ブームに対して上京進学しようとする青年たちに進路指導をする「遊学の栗」が第一号より登場することである。「はし書き」にはじまり、その後の号では「出京前の注意」「東京の学事」「慶応義塾」「女子の遊学」「東京大学」「高等中学の三予備費」「地方の少年へ」、それにいくつかの学校が紹介されている。これらの記事は明治二十三年『東京遊学案内』として刊行され、その後多数出版される「進学案内書」の先駆的役割を担っていくのである。進学・学校案内の連載が終了すると、職業指導・職業案内を「東京就学案内」として連載する。例えば「交際の注意」「礼儀作法」「責任」「約束」「手代と職工」などである。この案内書は職業案内書としてその先駆をなしたものである。また、青年論が多く論説の中に掲載される。志賀重昂「日本少年の為すべき事業」、愛卿学人「壮年・青年・少年（其一）壮士」、其二では青年、其三では少年などが連載される。さらには、明治二七ころには「処世の秘訣」を七回にわたって掲載している。さらに特筆しておかなければならないことは「少年投書」である。明治十年代からの投書雑誌の流れをくんで少年たちの文章修行の場を設定している。そこには当時の青年たちの精神形成の一端をうかがうことができる。

このような断片的な見方からも、この雑誌は学校教育を越えた領域から近代青年としての今日の持ち方、学校選択、職業選択に対する態度に指導性を発揮した教養・文化誌と言えよう。

- 2) 『少年世界』は、博文館が従来刊行していた「幼年雑誌、日本之少年、少年文学、少年玉手函、学生筆戦場等を廃刊し、其精粹を蒐め英華を総べて、此の『少年世界』」に注ぐことを目指し、明治28年に創刊し、昭和8年までの永きにわたって刊行された。日清戦争に勝利した日本、国民の意識は「東洋の一大強国として、世界の列国に歓迎せらるるの大希望を前に」していると言う意識が昂まり「小国民」としての少年の「覚悟」を鼓舞する、極めて国家主義立場からの刊行であった。ここで言う少年は、読者層から推測すると高等小学校・尋常小学校生徒のみならず学校にいけなかった少年をも含んだ形で幅広くこの雑誌は読まれていた。そこに一大出版社として博文館王国が出来上がる所以があった。多感な少年たちが自己を形成していくとき、学校の勉強はもちろんのことであるが、興味ある雑誌の記事に触発されることは多い。近代日本の少年雑誌の先駆的役割を果たした、『少年園』の記事は、文体において少し難しく、大人が子どもたちにお説教する形になっており馴染みがたいものになっていた。それに比較して、『少年世界』の方は、同じ内容のものを掲載したとしても、読書や物語の形態をとっている。読みやすく、アイデンティファイしやすいところに読者を引きつける魅惑があるように思われる。学校では教えてくれない、しかも楽しい物語であった。その意味からすれば『少年園』が学校教育の補完的役割を担ったように社会教育的役割を十分果たした雑誌と言えよう。この形式は廃刊まで続くのである。この当時の雑誌としては、決して珍しいことではないが、読者とのコミュニケーションをはかる、「投書」欄が設定されることである。少年たち自身が放すメッセージはそれ自体が隠れたカリキュラムとなり、少年たちを『少年世界』へ引きつけていく機能を果たしている。それはこの時期の雑誌が投書雑誌の性格を強く打ち出していく要因でもある。しかし、この種の雑誌は、商業出版雑誌であり、営利が目的でもある。それゆえ読者のニーズをいち早く取り込みニュースにしていかなければならない。従って、隠れたカリキュラムの中身を探るためには『少年世界』が何を提供していたのか克明に追っていかなくてはならない。先に社会教育的役割を果たしたと書いたが、『少年世界』を見ていくと「進学案内」をする記事が毎号のように掲載される、「東京遊学案内」の先

駆的役割をになったのが少年園のそれであった。しかし、明治後期になると博文館の「進学案内書」が大成を占めてくるのである。少年園の「進学案内書」から博文館の「進学案内書」へ変化してくるのは『少年世界』が刊行されてからである。その一方で博文館は『中学世界』を刊行し「受験案内」を具体化する方針を取るのである。その意味からすれば東京へ出て学問しようとする青年に進学のアリエンテーションを施す役割も果たす。さらには、非学歴者の学歴取得装置としての検定試験合格の学習書、講義録の広告は目を見張る。確かに、商品経済社会が浸透した社会において講義録広告を掲載するのは、財政的基盤を支える収入源であったことはいがめない。しかし、講義録広告に触発されて独学した青年も少なくない。山本滝之助もこの雑誌を購入していた。向学心に燃えながらも上級学校進学を断念しなければならなかった青年たちの講義録そのものが『少年世界』であったのと考えられる。それは、尋常中学校へ在学している青年も上級学校にいけなかった青年たちも同じ雑誌というメディアを通して自己形成をはかったのである。

3) 『中学世界』は、中学校生徒を読者対象とし、中堅国民としての教養と常識を学校教育を補完する目的で、博文館が明治31年に刊行し、昭和4年までつづいた中学生の総合雑誌である。本誌の特徴は、誌面の記事の変化に明確に写し出される。欄構成を見てみると、論説としての「中学世界」「史伝地」「理科算数」「国語漢文」「英語之采」「陸軍海軍」「家庭遊戯」「随筆編纂」「青年文壇」となっている。中学校のカリキュラムと同様の構成になっていることが特徴である。第1巻2号からは「受験案内」が新しい項目として設けられる。しかし、ここでの案内は、たとえば海軍兵学校入学試験問題及びその答案について情報化されていたに過ぎない。むしろメインとなる記事は、中学生としての覚悟・態度形成の方にウエイトがかけられている。例えば、谷本富「中学生修学の精神」、井上円了「中学生の記憶力養成法に就いて」などを掲載する。さらに、第3巻からは「学校案内」などが掲載されるようになる。また臨時増刊号を刊行し中学生の投書を掲載する。中学校のカリキュラムに準拠した欄構成は充実し、各教科について学校教育以外の教養を情報化し、高度な教養を身につけさせようとしている。このような記事傾向に変化が生ずるのは、1900年代を前後してである。つまり受験記事の増加がそれである。当時の入試・受験競争が激しくなってくる時代に対応してのことであると考えられる。しかし、それが本格的に受験専門誌の様相を見せ始めるのは、1910年代を前後してである。受験情報には、第1に高等学校・専門学校受験者のための受験情報を提供する一方で、第2には、非学歴者の学歴取得装置としての検定試験受験者への独学情報を提供するのである。たとえば、第21巻第5号では、「学力優等にして学資乏しき青年の進路」「全国奨学資金一覧表」、24巻では「若き独学者のための開かれた途」、28巻では「男女独学者の新活路各種教員検定試験法」、30巻には「中学校を経ず中学校卒業資格を得る法」、31巻では「文部省調査に基づく独学受験案内」などが報じられるのである。さらには、苦学生のための案内が多数掲載される、と同時に夜間中学校の記事も出る。たとえば、「職業学生独学青年新設夜間中学に来たれ」「東京苦学案内書」の連載する。『中学世界』は、中学生としての教養・啓蒙記事を情報化する一方で、受験雑誌としての性格を抱き、さらには1920年代には、非学歴者のための学歴取得の方法を教授する雑誌となっていくのである。その意味からすれば、中等学校生徒在学者、中等学校進学を希望するものを読者対象とした総合雑誌である。

4) 従来、同名の雑誌は北隆館（明治30年）など、三種類刊行されていた。いずれも短命に終わった。それらに比して、ここで取り上げる、大日本雄弁会講談社の『少年倶楽部』は、戦前に刊行された少年雑誌のなかで、もっとも長命の雑誌であった。

発刊の主意、編集の方針は「面白くて為めになる」雑誌作りということであった。読者対象は、都市部の中産階級の子弟は云うに及ばず、大衆青年・少年をも魅了する内容を持ち、幅広い裾野を持っていた。この雑誌は、学校教育以外の勉強だけでなく、大正から昭和の青年・少年たちの娯楽を通しての精神形成の場でもあった。どのように生きるか、どのように立身出世するか、どのようにして大人になっていくのか、という問題を小説の中に盛り込み、彼等の精神形成を励まし、促した少年雑誌であった。そのことを証明するかのように、発行部数は百万部を越える勢いを、昭和の始めには見せている。『少年倶楽部』は、明治時代に発刊される数々の大衆児童雑誌の流れを汲んだ、戦前期大衆児童雑誌の集大成であった。どのような少年小説が連載されていたのか。例えば「龍神丸」、「角兵獅

第2章 中学講義録の世界

子]、「ああ玉杯に花うけて」などが有名である。執筆人には江戸川乱歩、海野十三などが昭和期には推理小説などを書き下ろした。また田河水泡「のらくろ軍曹」は多くの少年たちを魅了した。その一方で、この雑誌は、「中学校の入学試験を受ける注意」・「中学校入学試験問題」(第4巻)など中学校・中等学校の入学試験問題を掲載して受験案内という性格も同時に持っていた。第13巻では「必ず合格する秘訣」を特集した。他方では、「小学校卒業生を歓迎する職業」(第14巻)など職業指導に関する記事も掲載している。この種の雑誌のもう一つの特徴は、読者たちとのコミュニケーションをはかる、「投書」のコーナーが設定されることである。さらにはその自由投書に編集部が返答している。さらに、広告が面白い。広告の中でもっとも多いのは講義録広告である。例えば「中学全科講義録」「小学校教員受験講義録」「井上英語講義録」「早稲田中学講義録」「通信中学・新中学講義録」「普通文官講義録」「大日本国民中学会講義録」などは当時の通信教育の実態を知る上での重要な資料である。しかし、戦時体制下では多くの制約をうけ画一的内容となった。日本の敗戦後、この雑誌は「少年クラブ」と改称し、現在の「少年サンデー」「少年マガジン」というコミック雑誌に変貌していった。

- 5) 『少年園』 No.19 (明治22年8月3日) 講義録広告より
- 6) 『少年園』 No.136 (明治27年6月18日) 講義録広告より
- 7) 『少年世界』 2—14 (明治29年7月15日) 講義録広告より
- 8) 『少年世界』 4—18 (明治31年8月1日) 講義録広告より
- 9) 高柳曲水著『小学卒業立身案内』(増訂6版) 育英書院 明治40年刊 55頁
- 10) 『少年世界』 6—11 (明治33年9月15日) 講義録広告より
- 11) 注9) 前掲書 54~55頁
- 12) 注9) 前掲書 56頁
- 13) 『少年倶楽部』 17—8 (昭和5年8月1日) 講義録広告より
- 14) 『少年倶楽部』 17—9 (昭和5年9月1日) 講義録広告より
- 15) 東洋大学創立100年史編纂委員会編『東洋大学百年史資料編I・上』平成元年刊 152頁
- 16) 同上書 280頁
- 17) 同上書 155頁
- 18) 同上書 280頁
- 19) 同上書
- 20) 中西敬二郎著「早稲田大学出版部小史二」(『早稲田大学史紀要』第4巻、昭和46年3月刊) 207頁
- 21) 同上書 209頁
- 22) 同上書 207頁
- 23) 同上書 207~208頁
- 24) 同上書 224~225頁
- 25) 早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史第二巻』昭和57年刊 483~484頁
- 26) 注9) 55頁
- 27) 石野元藏編・発『早稲田中学講義第三十三回第三号』大正14年11月刊 20~21頁
- 28) 『早稲田中学講義第三十三回第九号』大正15年2月刊 58~60頁
- 29) 注27) 前掲書 18~20頁
- 30) 注20) 前掲書「校外生(講義録講読者)数一覧表より」
- 31) 早稲田大学出版部編・刊『早稲田大学出版部100年小史』昭和61年刊 57頁
- 32) 吉村正著『独学者の進むべき道』早稲田大学出版部 大正14年刊 序より
- 33) 同上書 自序より
- 34) 『早稲田中学講義第三十三回第七号』大正15年1月刊 15~17頁
- 35) 注20) 「早稲田大学出版小史」より
- 36) 注31) 前掲書より
- 37) 天野郁夫著「日本の近代化過程における非学歴主義的選抜」(荒井克弘編『学歴主義にかわる社会的選抜システムの探索』平成元年科学研究費報告書 8頁

- 38) 『新国民』創刊号(明治36年4月)より
- 39) 桜井役著『中学教育史稿』臨川書店 昭和50年刊 三五六
- 40) 大宅壯一著『大宅壯一日記』中央公論社 昭和48年刊 480頁
- 41) 大島六太郎著『専門学校(高等学校を含む)入学資格検定試験について』(『福岡教育』第284号 大正9年11月号より)
- 42) 『文部時報』第152号 大正13年10月21日
- 43) 大阪府立北野高等学校校史編纂委員会『昭和44年3月校史史料集第二分冊学校日誌(明治6年~44年)』137~138頁
- 44) 河野正義編・発『中学検定指針』国民書院 大正6年 10頁
- 45) 雨田英一著「近代日本の青年と『成功』・学歴」(『学習院大学文学部研究年報 第35輯』)平成元年 305頁
- 46) 河野正義編・発『講義録による勉学法』国民書院 大正9年(七版)
- 47) 『明治四十三年以後専門学校入学者検定試験受験者名簿』(富山県立富山高等学校所蔵)
- 48) 『受験と学生』昭和3年10月1日 136~137頁
- 49) 注37) 前掲書 11頁
- 50) 天野郁夫著『学歴の社会史』新潮社 平成4年 278頁
- 51) 教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌・目次集成第III期・人間形成と教育第6巻中学世界』日本図書センター、平成3年参照
- 52) 『受験界』は第1巻第1号(大正9年4月1日)~第26巻第12号(昭和20年12月1日)まで刊行された。本誌は、受験専門雑誌であり、刊行の主意は「受験者相互の便益に資するため、試験の総ゆる方面に涉って…試験成功或は失敗談、受験準備学習方法、各種最近試験問題」を掲げ、受験指導を目的とした。ここで言う試験とは主に資格認定試験のことである。ところで、大正期には多くの受験雑誌が出版されるが、多くは、主に旧制高等学校を中心とする高等教育機関への受験者の受験準備雑誌であった。特に、『受験と学生』は多くの青年の共鳴を呼んだ。このような流れの中に検定試験受験準備雑誌が登場する。その一つが『受験界』である。この雑誌の大きな特徴は、高等試験、普通文官試験等非学歴者の学歴取得のバイパスとしての検定試験の指南書としての役割を担った点にある。例えばいくつかの記事を、列挙してみよう。「変則の勉強から帝大法科に入る迄」(連載)、「専門学校入学者検定試験合格記」等である。ここには受験の動機、受験勉強の仕方、例えばどのような参考書を利用したのか、どのくらいの勉強したのか、試験場の雰囲気等、学習の様式や風景が記されている。指導者のいない独学者はこのような受験記を読み、それを指針として頑張るといふ刺激剤としていたのである。
- この資格認定試験受験者のための受験指導雑誌は、第二次世界大戦後もなお継続されるが、他のこの種の雑誌と同様、新制中学校・高等学校が軌道に乗り出すに従ってその役割を終え廃刊せざる終えなくなってゆくのである。すなわち、資格試験に合格することによって得られた学歴や学校歴へと徐々に変化していく、まさにそのはざまをこの種の雑誌は歩くことになる。
- 53) 『受験界』 2-5 (大正10年5月1日)より
- 54) 寺本伊勢松編『専門学校高等学校入学検定独学受験法』大明堂刊 138~139頁
- 55) 『受験界』 8-2 (昭和2年2月10日)より
- 56) 『受験界』 8-4 (昭和2年4月10日)より
- 57) 『新国民』 57-1 (昭和8年4月5日)より
- 58) 『新国民』 61-1 (昭和10年4月5日)より
- 59) 『新国民』 60-2 (昭和9年11月5日)より
- 60) 『新国民』 60-6 (昭和10年3月5日)より
- 61) 同上書より
- 62) 『新国民』 57-6 (昭和8年9月5日)より
- 63) 『新国民』 60-5 (昭和10年2月5日)より

第2章 中学講義録の世界

- 64) 『新国民』 57—6 (昭和8年9月5日) より
- 65) 同上書より
- 66) 『受験界』 15—3 (昭和9年3月1日) より
- 67) 『受験界』 16—1 (昭和10年1月1日) より
- 68) 『受験界』 60—4 (昭和10年10月1日) より
- 69) 『受験界』 13—9 (昭和7年9月1日) より
- 70) 『受験界』 14—5 (昭和8年5月1日) より
- 71) 拙稿「『独学』史試論—中学講義録の世界をめぐる」(寺崎昌男他共編『近代日本における知の配分と統合の第一法規』平成5年参照)